

A Conflict between a City and a Lord over the Serfdom in the Northwestern Switzerland(1465) : Rereading and Retyping of the handwritten Correspondence

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-08-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: TANAKA, Toshiyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00066980

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



スイス北西部の体僕制をめぐる都市・領主間紛争（1465年）

——往復書簡の再読と再活字化——

田 中 俊 之

I.

ドイツ南西部やスイス北西部の農村地域では15世紀から16世紀前半にかけて領主・領民間紛争が激化した。各地の領主が体僕制（ライプアイゲンシャフト、農奴制）を導入したことがその主要因である。14世紀半ばのペスト禍以降のいわゆる中世後期の危機（人口減少、農業低迷）にともない、経済的困窮に直面していた領主の多くは、所領の一部を質入れあるいは売却するなどして急場をしのいだ一方で、領主支配権の再編強化をめざして体僕制を導入し、それまで成長を遂げてきた領民（農民）による共同体自治に著しい制限を加えたのである¹。移動の制限、身分外婚や領外婚の禁止、死亡税・人頭税ならびに賦役・軍役をとまなう人格的拘束や経済的負担義務の強化を特徴とする体僕制の導入は、領民の強い反発を招き、多くの地域で領主・領民間紛争を惹き起こしたのであった²。これらの紛争は、やがて宗教改革思想の影響とともに1520年代中葉に広範囲にわたって展開したいわゆるドイツ農民戦争の元凶とも位置づけられる³。

スイス北西部の村落プラッテルンとその周辺地域もまたこうした領主・領民間紛争の舞台となった。プラッテルンはライン川屈曲部の大都市バーゼルの南東方向に位置する比較的大きな村落であり、ハプスブルク家の封臣エプティンゲン家の所領の1つである。リップマンの研究によれば、プラッテルンに体僕制が導入されたのは、1464年、領主ハンス・ベルンハルト・フォン・エプティンゲンによってであった⁴。それまでのプラッテルンはエプティンゲン家の2つの分家系の分割統治下にあり、ハンス・ベルンハルトが村落全体の4分の1を、従兄弟たちが4分の3を統治していたが、1464年夏に従兄弟たちがハンス・ベルンハルトに土地所有権、裁判権を売却したことにより、ハンス・ベルンハルトは村落全体を統治する単独の領主となった。そして同年9月にはハンス・ベルンハルトは体僕制を導入して領民の大半を体僕身分に貶め、忠誠宣誓を求めたのである。

しかし数度にわたる忠誠宣誓の求めに対し、およそ120名の領民のなかから宣誓拒否をする者たちが現れた。その後1年数ヶ月のうちに領民の大半は宣誓に応じたものの、残る10余名は拒否を続け、領主・領民間の緊張は高まった。1465年にはバーゼルの仲裁により近郊の小都市リースタールの都市法がプラッテルンに導入され、体僕制下にありながら周辺諸村落に対し都市法受容による法身分的格上げが図られたものの⁵、1467年に領民38名がバーゼル南方の中都市ソロトゥルンとブルクレヒト契約を結び⁶、さらに1468年にプラッテルンの領民全体ならびに周辺村落ムテンツ、ミュンヒェンシュタイン、ヴィルトエプティンゲンの領民がソロトゥルンとブルクレヒト契約を結んで市外市民権を得るや、ハンス・ベルンハルトとソロトゥルンは敵対関係に陥った。そればかりでなく、ブルクレヒト契約の拡大によってソロトゥルンが周辺諸村落への影

響力を強めることに警戒したバーゼルをも巻き込んで、1470年代にかけ、バーゼル、ソロトゥルン、諸村落等の時期に応じて相互に交錯する利害関係のもとで、しばしば武力行使をともなう大規模な都市・領主・領民間紛争へと拡大・展開したのである。

他方で、村落における領主・領民間紛争は同時に、体僕制の導入当初から近隣都市の利害を絡めた都市・領主間紛争でもあった。リップマンは、プラッテルンの領民による宣誓拒否の要因として、村落支配の統合が一部にハンス・ベルンハルトを正当な領主と認めることへの疑義を招いたこと、体僕としての忠誠宣誓を男女一律に課したことが領民の伝統的な家父長制的自己意識を傷つけたこと、また領主館の池への給水が共同体所有の泉から行われるようになったことへの不満、早朝ミサが村落教会ではなく領主館付属の礼拝堂で行われるようになったことへの不満、これまで共同体自治のもとで行われてきた耕地番や陪審員などの選出や種畜の飼育等々の共同体自治案件に関する現状変更への不満に加え、富裕農民クレヴィン・リュッチーの事件が領民たちに与えた衝撃を挙げる⁷。このクレヴィンの事件こそが、都市・領主間紛争の契機となった。富裕農民でありながら体僕身分に落とされたクレヴィンは、プラッテルンからバーゼルのアムト（管区）の1つヴァルデンブルクに移住し、実質的にバーゼルの庇護民となっていたが⁸、それに対し、ハンス・ベルンハルトはクレヴィンの妻子の身柄をプラッテルンにおいて拘束したため、妻子の即時解放を求めるバーゼルとそれを拒否するハンス・ベルンハルトとの間に紛争が勃発したのである。

本稿は、プラッテルンにおける1465年という紛争初期に関して、バーゼルとハンス・ベルンハルトの間で取り交わされた協約の内容を確認した文書（布告）と、その後、協約で定められた既定の履行をめぐる複数回やりとりされた往復書簡を史料に、体僕制をめぐる噴出した領主・領民間紛争に都市が関与した場合の都市側、領主側それぞれの認識を、両者の主張および主張の行間から読み取ろうとするものである⁹。15世紀後半のスイス北西部は1501年にバーゼルがスイス盟約者団に加盟する以前のおおむねハプスブルク系貴族統治下の地域であり、15世紀に入りますます勢力を拡大させたスイス盟約者団による1415年のアールガウ占領以降¹⁰、その西方に位置するこの地域では、本拠地アールガウを奪われたハプスブルク家の威光が失われていくなか、同家と封建関係を結ぶ在地貴族の勢力もまた弱まりつつあった。エプティンゲン家もその1つである。代わってこれらの地域に領域拡大をもくろんだのがソロトゥルン等のスイス西部の都市であり、またスイス盟約者団（チューリヒ、ルツェルン、ベルンを含む）であった。バーゼルはそれまで他の都市に比べれば控えめな領域政策を展開していたが¹¹、1461年に都市の南東方向に広がるリースタール、ファルンスブルク、ヴァルデンブルク、ホムブルクの4アムトなどを包含する広域シスガウ・ラントグラーフシャフトを購入して以降、ラントグラーフ（方伯）としての地位を獲得し、隣接するプラッテルンの領主ハンス・ベルンハルトと裁判権をめぐるしばしば紛争状態に陥ったのである¹²。クレヴィンの事件も広義にはその一環として位置づけられるだろう。そのような、一方でスイス北西部に揺るぎない地位を確立しえた自由帝国都市バーゼルと、他方でしだいに影響力が弱まっていくハプスブルク系の封建領主エプティンゲン家という、その後の趨勢を分かつ両地域権力は、書簡のやりとりを通じて相手にどのように対峙したのであ

ろうか。本稿では、都市・領主間紛争に焦点を当てることによって、従来の研究があまり顧みてこなかった地域の視点からスイス盟約者団国家形成のプロセスを捕捉したい¹³。ただし今回は手稿史料の活字化に重点を置いたことと紙幅の関係上、本論では最低限の指摘にとどめざるを得ず、今回の指摘から浮上した重要な考察課題については別稿に委ねざるを得ないことをお断りしておく。

本稿で用いた手稿史料はすべて同時代の複写であり、バーゼル農村邦公文書館 (Staatsarchiv des Kantons Basel-Landschaft) 所蔵の古文書 Altes Archiv (略号 AA) の AA1001 Urkunden 537 (以下、第 537 巻と略記) の 90-102 ページに収録されているものである¹⁴。作業としてまず手稿史料を判読して活字化し、手稿史料のデジタル写真と左右ページに並べて対照できるようにした。末尾には註釈を付して中高ドイツ語理解に多少の便宜を図った。本文中に引用した部分訳はそれらの作業から捻り出した試訳である。

II.

第 537 巻 90-102 ページは、バーゼル市長ハンス・フォン・ペーレンフェルスとバーゼル都市参事会の名で布告された 1465 年 8 月 1 日付文書 (90 ページ) と¹⁵、同市長を代表とするバーゼル側とハンス・ベルンハルトの間で交わされた往復書簡 10 通 (91-102 ページ) から成る。10 通の発信者、受信者は以下のとおりである。(B: バーゼル、HB: ハンス・ベルンハルト・フォン・エプティンゲン)

- 第 1 通: B → HB (91 ページ 1-20 行目)
- 第 2 通: HB → B (91 ページ 21 行目～93 ページ 23 行目)
- 第 3 通: B → HB (93 ページ 24 行目～94 ページ 27 行目)
- 第 4 通: HB → B (94 ページ 28 行目～96 ページ 7 行目)
- 第 5 通: HB → B (96 ページ 8 行目～97 ページ 29 行目)
- 第 6 通: B → HB (98 ページ 1-22 行目)
- 第 7 通: HB → B (98 ページ 23 行目～100 ページ 3 行目)
- 第 8 通: HB → B (100 ページ 4-13 行目)
- 第 9 通: B → HB (100 ページ 14 行目～101 ページ 17 行目)
- 第 10 通: B → HB (101 ページ 18 行目～102 ページ 22 行目)

最初に 10 通の往復書簡の前提となる 1465 年 8 月 1 日付文書 (90 ページ) を訳出しておこう。冒頭部分の「この書状でもって皆の者に言い渡す」(90 ページ 2 行目) から、この布告が私信ではなく公的文書であることを、また文面全体から、バーゼルとハンス・ベルンハルトの間で交わされた協約の内容が確認されていることを知る事ができる。([] は筆者による補足。)

【1465 年 8 月 1 日付文書】

われわれ騎士にして市長ハンス・フォン・ペーレンフェルスとバーゼル都市参事会はこの書状でもって皆の者に言い渡す。わが領民クレヴィン・リュッチーは騎士にして強大なる領主ハンス・ベルンハルト・フォ

ン・エプティンゲンのもとプラッテルンに居住していたが、今はわれわれのもとバーゼル〔領〕に移住している。上記のベルンハルト殿は彼に対しいくつかの原因によりプラッテルンに戻ることを禁じ、裁判に召喚したので、われわれは名誉ある都市参事会仲間すなわちペーター・シェーンキント、ベルンハルト・フォン・ルーフェン、クラウス・フォン・アントローを通じ、彼らの間にあった対立をよりよく解決させ、それに応じてそののち次のように書き留めさせた¹⁶。すなわち、わが領民クレヴィン・リュッチーがわれわれのもとバーゼル〔領〕に住むことを望む期間すべてにおいて、彼が妻をそばにとどめ置きたいならば、他のベルンハルト殿の体僕と同様にベルンハルト殿に担税義務を負い、奉仕すべきである。しかしクレヴィン・リュッチーがいつか再びベルンハルト殿のもとプラッテルンへ移り住みたいならば、そののちはベルンハルト殿とその後継ぎに対し、われわれのアムトに住まう同ベルンハルト殿の体僕がわれわれやわがアムトの人々を行うのと同じように、同ベルンハルト殿とわれわれの間で以前交わされ印璽の付された協約の内容に従って、奉仕し行動すべきである。しかし彼がベルンハルト殿のもとに住まない期間は、自身の家畜ともどもプラッテルンの草地も牧草地も単独で用益権を所有すべきではなく、自分の土地以外で耕作しようと思う場所で方策を練らなければならない。すなわち自分がそのために必要とする馬についても然り、同牧草地についても然りである。彼が自分の土地の収穫に取りかかりたいのであれば、ベルンハルト殿や誰かのせいでそれが妨げられるべきではない。また上記のクレヴィン・リュッチーは、ベルンハルト・フォン・エプティンゲン殿とは疎遠になっている成人した娘を再び手元に呼び寄せたい場合には、あらゆる努力と能力を駆使すべきである。それに対して上記のベルンハルト殿が彼の権利、すなわちクレヴィン・リュッチーの財産に関して〔クレヴィンに〕それを禁じ、彼を裁判に召喚しようとして企て、実行に移そうとしたなら、〔クレヴィンは〕われわれのもとバーゼル〔領〕にとどまるべきであり、それをめぐっては彼に何かを行うことを要求すべきではないことがクレヴィン・リュッチーには法でもって知らされるだろう。またベルンハルト・フォン・エプティンゲン殿が同クレヴィン・リュッチーの子の1人もしくはそれ以上にいつか聖なる結婚を世話したいと望んだなら、クレヴィン・リュッチーを呼び寄せ、彼の意向とともに話し合うべきである。そして上記のわが都市参事会仲間がわれわれに述べたように、このような協約に基づいて、ベルンハルト殿とクレヴィン・リュッチーはあらゆる過去の対立といきさつについてこの書状の日付までに完全に調整し示談にすべきである。すなわち彼ら双方とも〔体僕〕宣誓の代わりに信任によって維持しあうことを約束し誓うべきである。このことをわれわれは双方が文書として持ち、わが都市の秘密の印璽をこの書状にぶら下げ、われわれおよびわが子孫に損害なきよう願わん。わが主キリスト生誕後1465年8月第1日の聖ペトロの祝祭日に交付。

以上より、本協約が領主・領民間の紛争の解決をめざして締結された仲裁合意文書であったことがわかる。さて以上のような協約の内容をふまえてその後交わされた往復書簡で、双方は何を主張したのか。

III.

まず第1通(B→HB)には、「貴殿とわが領民クレヴィン・リュッチーは先日われわれの前に出頭したが、あらゆる陳述ののち、物別れに終わったため、われわれはクレヴィン・リュッチーといくつもの事柄を取り決めた。すなわち、彼自らが姉(妹)のところへ赴き、娘を貴殿の手に渡

してもよいか否かを誠心誠意話し合うことを。そして熱意の証しとして彼は信用に足る証文を差し出すべきである。」(91 ページ 5-10 行目)とある。ハンス・ベルンハルトとクレヴィンの間の対立は、おそらくバーゼルの都市仲裁裁判所に持ち込まれたものの、協約に沿った解決に至らず、バーゼルとクレヴィンとが協議し、対策を練り直したということであろう。そして合意されたのは、ハンス・ベルンハルトに娘を差し出してよいかどうかをクレヴィンが姉(妹)と協議し、ハンス・ベルンハルトに証文を差し出すことだった。続いて「そこでわれわれは、彼がそれに従って出向くことに期待するが、それに従ってわれわれは貴殿に誠心誠意、彼に妻と子を解放し、彼のもとへ来させることを要求する。それをわれわれは協約に従って正当に、まさしく貴殿には適切な行動により平和的に報いるべく求めるのである。」(91 ページ 11-15 行目)とある。ここからは、ハンス・ベルンハルトがクレヴィンの娘を差し出すことを要求していること、またハンス・ベルンハルトがクレヴィンの妻子を拘束していたことが明確にわかる。バーゼルはハンス・ベルンハルトにむけて、協約に従って妻子を解放することが正当であり、ハンス・ベルンハルトが適切に振舞うことによって問題を平和的に解決へと導くのだと説くのである。

第 2 通 (HB→B) は第 1 通への返信である。ハンス・ベルンハルトはバーゼル側に対し、その対応に満足していることを表明したうえで、「娘は私には疎遠になっていたが、もし娘が私の手元に来るのなら、私は母親を解放しよう。しかし娘が私の手元にもたらされた時に私は喜んで上記のクレヴィンの妻を拘束から解き放つつもりである。」(92 ページ 5-9 行目)とし、娘と引き換えにクレヴィンの妻の解放を約束するのである。その一方で、彼のなかには体僕への非難が渦巻いていた。「不十分な連中 [体僕] に関して言えば、彼らはかなり公正さを欠いていることがわかるでしょう。貴殿ら分別のある方々が聴取をした際、彼 [クレヴィン] は私のことを、私が彼をブラッテルンから力づくで不当にも追放した、しかも彼に対してだけではないなどと、公然と貴殿らの前で咎め立てた。」(92 ページ 19-23 行目)と、クレヴィンが事実でないことを事実であるかのように申し立てたと彼を非難し、事がこじれたのは体僕側に非があったからだと主張する。領主支配への領民の抵抗を領主が暴力で抑制することが望ましい対応ではないことを、ハンス・ベルンハルト自身が認識していたと言える。

加えて第 2 通でハンス・ベルンハルトは次のようにも述べている。「疑いもないのは、彼が貴殿らの仲間 [領民、体僕] ではないということだ。彼がそう望もうともそのようなことは起こりもしないし、なされもしないのだ。(93 ページ 5-6 行目)とし、ハンス・ベルンハルトは、クレヴィンがバーゼルではなく自身の領民であることを強調したうえで、しかし「彼が一庇護民として、すなわちブラッテルン出身の奉公人として私に奉仕したくないのであれば、ブラッテルンに自有地も家も持つ立場にないのだ。」(93 ページ 6-9 行目)と断言する。なぜなら、「むしろバーゼルでパンを焼いたり塗装をしたり居酒屋の亭主になるなどしては、たとえブラッテルンで耕作のために土地を使用するつもりだと言っても、実際はそうはしてこなかったのだから、[私は] 損害を被るばかりである。」(93 ページ 9-11 行目) からだと指摘するのである。それゆえ、「私は貴殿らへの税に関するそのような転用¹⁷や[私への]損害が許されるのを私は望まない。」(93 ページ 14-15 行目)とし、「私は [彼が] 貴殿らに [偽の] 証拠を示すためにそうした [土

地の] 使用と家の維持をさせることを彼にはもはや許すことはできないのだ。」(93 ページ 15-17 行目) と怒りをあらわにする。最後にバーゼル側に対しハンス・ベルンハルトは、「そうしたこと [措置を取る] で私を邪悪であるなどと認識しないでほしいと、私は貴殿ら分別ある方々に願う。」(93 ページ 17-18 行目) と訴えるのである。

第 3 通 (B→HB) では、バーゼル側からクレヴィンの妻の解放要求が繰り返される。ハンス・ベルンハルトからの返書に対し、「われわれはまさしく不名誉で奇妙なことだと理解し受けとめている。貴殿は協約を顧慮し、[クレヴィンの] 妻を同協約が示すように夫のもとに行かせることを願ったのだが [そうはならなかったようだ]。』(94 ページ 2-5 行目) としたうえで、「われわれは貴殿がわが領民クレヴィン・リュッチーに対し、その妻を代償なく拘束から解放し彼のもとへ行かせることを、この書状でもって強く要求する。」(94 ページ 15-18 行目) とあらためて求めたのである。また「貴殿はわが領民 [クレヴィン] には自分の土地を耕作する権利がもはやないものと思っているようだが、それについては、彼は望みのままに自分の土地を耕しそこからの収穫を得てもよい、と協約が示しているではないか。」(94 ページ 8-11 行目) とハンス・ベルンハルトが協約に違反してクレヴィンの権利を奪っていると非難するのである。

第 4 通 (HB→B) はハンス・ベルンハルトによる反論である。ここでハンス・ベルンハルトは自分の拘束下にある「わが体僕であるところの彼の妻と息子」(95 ページ 9 行目) について見解を述べるが、彼はこの 2 人について、「私は引き続き公正を重んじて行動してきたし、それは協約に反してなどいない。」(95 ページ 10-11 行目) としたうえで、息子については特に、「私は [クレヴィンの] 妻の子である下僕を法に照らして処遇するつもりであり、したがって彼には何を法が与えてくれるのかを皇帝の法の規定に従って取り扱わせるつもりだ。それはクレヴィンも誰も逆らい得ないものであり、公正に従って行動すべきであり、してもらいたいものである。彼 [クレヴィン] が権利を喪失するか否かはわが上級裁判権において発見されるものであり¹⁸、(中略) 私が信頼を置かない法と別様に扱うつもりはない。」(95 ページ 16-22 行目) とする。

ここにハンス・ベルンハルトの主張の核心を認めることができる。世俗法の頂点にあるのは皇帝法であり、その体系のもとに正当な裁判が存在するという認識である。現皇帝がハプスブルク家のフリードリヒ 3 世であり、究極的には皇帝の行使する法に何びとも服従すべきであるとの認識を根拠に、ハプスブルク家の封臣であるハンス・ベルンハルトが皇帝から委ねられて行使する上級裁判権こそがクレヴィンを裁く正当性を持っているのだと主張したのである。しかもだからと言って、「信頼を置かない法」をないがしろにはしないということも付言している。「信頼を置かない法」とは都市バーゼルのもとで調整された協約を指しているのであろう。そこにはあくまでハプスブルク家の封臣としての矜持を主張しようとする村落領主の本音を垣間見ることができる。

IV.

第 5 通 (HB→B) にもまたハンス・ベルンハルトの強い主張が見受けられる。一連の往復書簡が複写であることは先述したとおりだが、第 5 通の始まる直前に次のようなメモ書きが見られる。

「これは直近の書状のなかに入れていた紙片の内容である。」(96 ページ 8-10 行目) とあるところから、第 4 通と一緒に封じられていた書簡と思われるが、書き出しからして独立した書簡だと判断できたため、ここでは第 5 通と見なした。

冒頭近くには、バーゼルによる第 3 通に対し、「しかし貴殿ら分別のある方々は、私にその責任義務はないわが領民を解放せよという強い要求とともに私の依頼を強く拒否した。」(96 ページ 14-16 行目) と、ハンス・ベルンハルトはバーゼルとのやりとりが成果を生まなかったと指摘したうえで、次のように述べる。「協約の内容はわが領民に関してどこか間違いがあるように私には思えるので、貴殿らには [クレヴィンの] 妻あるいは [クレヴィンの] 息子について正しく取り組んでもらいたいと、わが慈悲深きバーゼルの方々、あるいは秩序正しき裁判官であるバーゼル全司教区の慈悲深き司教区裁判所主席判事殿に申し出る。しかしそこで誰かが節度のない考量をしようとするならば、私は当然ながらわが慈悲深き下バーデンの辺境伯殿、あるいはわが慈悲深きレットレンの辺境伯殿、あるいはかの慈悲深きラントフォークトたるハンス・フォン・フラックスラント殿、あるいはわが慈悲深きフォン・ブスナング殿、あるいはわが慈悲深き伯オスヴァルト・フォン・ティールシュタイン殿、あるいはわが慈悲深きフォン・ラッポルトシュタイン殿、あるいはベルンのシュルトハイスおよび都市参事会、あるいはチューリヒのブルクマイスターおよび都市参事会、あるいはソロトゥルンのシュルトハイスおよび都市参事会、あるいはルツェルンのシュルトハイスおよび都市参事会、あるいは盟約者団の民、あるいはわが慈悲深きオーストリア等の主人、ラントフォークトおよび参事会に頼って申し出る。(中略) 私はわが慈悲深きオーストリア等の主人のもとで裁判権を有し、彼らを誓約させる地位にあったのだ。」(96 ページ 22 行目～97 ページ 13 行目)

領主の認識に関して、ここにもう 1 つの核心の山場を見て取ることができる。第 1 に、ハンス・ベルンハルトはバーゼルと交わした協約の内容の正当性に疑念を抱く自身に気づき、それを表明したということ。これまでバーゼルと交信する過程で彼はバーゼルが公正だと主張する協約への疑念を抑えきれなくなったと見える。したがって第 2 に、協約の正当性をもう一度バーゼルの分別ある方々、そして秩序正しく信頼の厚い司教区裁判所の主席判事に再検討を委ねたのである。ところが第 3 に、それでもなお節度のない審議によってもし疑念を深める結果になった場合には、とハンス・ベルンハルトは誰もが認めるべき「権威」にすら疑問の眼を向けた。第 4 に、もしも疑念を晴らせない場合にハンス・ベルンハルトが依存しようとしたのが、下バーデンの辺境伯からオーストリア、すなわちハプスブルク家に至るまでの上記の 12 の「権威」だった。第 5 として、ハンス・ベルンハルトがハプスブルク家という最大の「権威」を後ろ盾に自らの支配の、すなわち裁判権を行使する正当性を確認しようとしたのである。

ここでは第 4 点について言及しておきたい。ハンス・ベルンハルトの認識では、本紛争の解決において、バーゼル都市参事会と交渉するのが第 1 段階だとすれば、最も近い第三者として司教区全体を束ねるバーゼル司教が第 2 段階の仲裁裁定者になりえたこと、それでも解決に至らない場合に第 3 段階としてハンス・ベルンハルトが挙げた仲裁裁定者が上記の 12 の「権威」であった。そのうち 6 つの「権威」はおそらくハプスブルク家と密接な関係を持つ近隣の有力貴族であ

っただろう。そして最終的に行き着くのが、12 番目に挙げられている封主ハプスブルク家(皇帝)であるのは言うまでもない。その前に、近隣の有力なハプスブルク系貴族に次いで挙げられたのが、ベルン、チューリヒ、ルツェルンという 3 つのスイス盟約者団都市、それにその後ハンス・ベルンハルトともバーゼルとも緊張をはらむことになる中都市ソロトゥルンであった。さらにスイス北西部にとっては敵対勢力になりかねないスイス盟約者団そのもの(ウーリ、シュヴィーツ、ウンターヴァルデンの原初三邦を主体とする勢力か?)をハンス・ベルンハルトが仲裁裁定者としたことは非常に興味深い。15 世紀後半におけるスイス北西部の在地貴族にとっては、在地の紛争の際にまずはバーゼルという地域の内部で解決が図られ、解決に至らなかった場合には、封主たるハプスブルク家を最後に、それまでに有力なハプスブルク系貴族はもちろん、ハプスブルク家としばしば敵対したであろう近隣の有力なスイス盟約者団都市ばかりか、スイス盟約者団そのものまでもが仲裁裁定者の候補たりえたのである。体僕制をはじめ支配権(裁判権)をめぐる紛争解決がスイス盟約者団国家の形成のプロセスにおいて重要な要素の 1 つであったとすれば、権力関係の構図として、盟約者団 vs.ハプスブルク家の二項対立では捉えきれない構図を地域の視点は示している。

V.

第 6 通 (B→HB) は、ハンス・ベルンハルトからの 2 通の書簡(第 4 通、第 5 通)に対するバーゼルの所見である。「嘆かわしい引き離しについてはわれわれにはまことにまさしく屈辱的であり、良き隣人関係に寄与する考えだとはとても思えない。」(98 ページ 6-8 行目)と述べたうえで、「哀れな下僕の妻が協約に反して捕らえられたのだ。差し押さえられた者が相応の権利を認められるべきだというのが不公正だと貴殿自身は理解したわけだ。しかしそれについてはわが領民のために彼の妻を拘束から解いて彼のもとへ遣わしてほしいとわれわれは重ねて要求する。」(98 ページ 9-15 行目)とクレヴィンの妻の解放を粘り強く要求するのである。

それに対し第 7 通 (HB→B) で冒頭よりハンス・ベルンハルトは、「貴殿らはわが記述を屈辱的に隣人関係を損なうものだと確信したようだ。」(98 ページ 24 行目～99 ページ 1 行目)としたうえで、「本件での貴殿らが不快でいることは私には好ましいことではない。貴殿らが私に対して激情を抱かないよう真に望んでいる。」(99 ページ 7-9 行目)、あるいは「今日以降、貴殿らの不機嫌が減じ、貴殿らとの良き隣人関係のなかにとどまれるよう私に委ねてもらうことを切に望む」(99 ページ 12-14 行目)と述べているところからも、バーゼル側との隣人関係を重視し、関係修復を探ろうという姿勢が垣間見える。良き隣人関係は、住民の個々の生活空間のみならず支配者間においても地域内平和の構築にとって重要な構成要素であったと言えよう¹⁹。その一方でハンス・ベルンハルトは、「しかし私はあらゆることに不公正を要求してはいないし、何ら公正でない事柄をこれまで要求したこともない。」(99 ページ 14-16 行目)と以下、弁明に終始するのである。

第 8 通 (HB→B) は、ハンス・ベルンハルトによるバーゼルへの返信の催促である。どうやら返答を求めたもののバーゼルからの返事がなかなか得られず、「貴殿ら分別ある方々には回答を長々と待たせず熱意をもって私に向き合うことを願う。」(100 ページ 10-12 行目)と述べている。

第9通(B→HB)は、ハンス・ベルンハルトが待ち焦がれていたバーゼルからの返書であるが、その内容は厳しいものであった。ハンス・ベルンハルトの弁明を「言い逃れ(口実)」(100 ページ 19 行目)と断じたうえで、「貴殿にはそのような言い逃れをわが書簡に対し行う必要はないとわれわれは考えている。なぜなら貴殿が協約に従って[クレヴィンの]妻を代償なしに解放し、わが領民のもとに遣わせばそれでよいからだ。貴殿には、わが慈悲深きバーゼルの領主に願い出てほしい。法に従って正しい裁判を開くよう。そして貴殿とわが領民の間の案件を法により決するよう。」(101 ページ 2-8 行目)と、ハンス・ベルンハルトにバーゼルの領主、すなわちバーゼル司教の法廷で法による決着をつけようではないかと提案するのである。そして「それにより貴殿は彼[クレヴィン]とわれわれが公正であることを十分に理解するだろう。」(101 ページ 10-11 行目)と述べる。バーゼル司教に仲裁を願い出ることは、ハンス・ベルンハルト自身が第5通で希望したことでもあり、バーゼルはそれに毅然と応じたことになる。

第10通(B→HB)は、第9通で提案されたように本件がバーゼル司教による裁定にかけられ、その結果、第2の聴取記録が作成されたことを確認し、その手続きが記されたものである。通常同じものが2通作成され、ここでも1通はハンス・ベルンハルトに、もう1通はバーゼル都市参事会に送られ、それぞれ保存されることとなった。裁定の具体的な内容については、第10通には何も記されていない²⁰。

VI.

これまでたどってきたように、スイス北西部の都市バーゼルと近隣村落プラッテルンの領主ハンス・ベルンハルト・フォン・エプティンゲンの間で交わされた書簡のやりとりの内容から、体僕制をめぐる都市・領主間紛争における両者の認識を、いくつかのポイントに分けて抽出することができる。

第1に、都市、領主双方にとって領民(体僕)は、当然ながら貴重な人的資源であった。体僕制の要件の1つである人頭税は領主の収入源として重要であり、本件のように、クレヴィンが自有地を放置したままバーゼル[領]に移住したことは、領主にとって領民による耕作収入のみならず人頭税をも失うことになり、容認できなかつたのであろう。クレヴィンが体僕制下で領主に対して負うべき賦役、諸税が実質的にバーゼルに納付されることは、当の領主にはデメリットしかなかったからである。したがって、クレヴィンの妻子をいわば人質として拘束することにより領主は経済的防衛手段を講じたとも言うる。しかしこのことが領主・農民間に、ひいては都市・領主間に紛争を招いたのであった。

第2に、都市、領主双方が書簡において *billigkeit*、*billig* という言葉を多用し、それを行動規範あるいは遵守義務として互いの行動を縛り合っていたことから、いかに公正であるかを競うかのように都市も領主も支配の正当性根拠を追求していたことが読み取れる。本件の場合、都市にとっては公正さの根拠は先の協約にあり、それを忠実に実行することが公正であることの証しであった。他方、領主が領民に求めたのは、領主に対し領民としての義務をいかに忠実に果たすかであり、それこそが公正さの証しであった。クレヴィンの行動はハンス・ベルンハルトにとって

不公正きわまりなかったのである。またハンス・ベルンハルトはくだんの協約には領民の行動に領主自身の利益を損なう抜け道があったと認識しており、公正さの根拠になりうるような信頼の置ける法ではなかったのである。

第 3 に、都市、領主双方が法の遵守に社会秩序の基準があると認識していたことは共通していたと言ってよい。しかしハプスブルク系貴族としては、体系化された法の頂点にはハプスブルク家の皇帝が行使する皇帝法があり、その法体系のもとに自身が行使できる上級裁判権が位置づけられると認識していた。旧来の封建秩序とは異なる新たな社会秩序を生み出そうとしていた先進的な有力都市とは明らかに認識を違えていたのである。

また第 4 に、地域の平和は良き隣人関係によって構築されるという理念が都市、領主双方に共有されていたが、当事者間で解決できない確執や対立の仲裁裁定は、ここではバーゼル司教に委ねられることになった。しかしそれでも解決しない場合に領主が仲裁裁定者として想定していたのは、まず近隣の有力なハプスブルク系貴族であり、究極はハプスブルク家であったが、同時にスイス盟約者団都市やスイス盟約者団そのものも排除の対象ではなかった。スイス盟約者団国家の形成のプロセスにハプスブルク系貴族のかかわる紛争を位置づけようとした場合、旧態依然としたスイス盟約者団 vs. ハプスブルク家の二項対立的構図は、地域の視点からは成り立ちにくいという見通しを立てることができる。

ただしこの第 4 点に関しては、ハンス・ベルンハルトが裁定者として挙げた 6 名のハプスブルク系貴族および有力 3 都市を含むスイス盟約者団勢力の動向、バーゼルの地域から東西南北に少し枠を拡大した広域内での権力構造をとりわけ 1415 年アールガウ占領以降について追究する必要があるだろう²¹。検討を続けたい。

註 (紙幅の都合上、必要最小限にとどめた。)

1 体僕制に関してはさしあたり、Claudia Ulbrich, *Leibherrschaft am Oberrhein im Spätmittelalter*, Göttingen 1979; Peter Bierbrauer, *Bäuerliche Revolten im Alten Reich*. in: Peter Blickle(Hg.), *Aufbruch und Empörung?*, München 1980, S.1-68; Peter Blickle, *Von der Leibeigenschaft zu den Menschenrechten*, München 2003 を参照。

2 日本における体僕制研究としてはさしあたり、三成美保「14-16 世紀の西南ドイツにおけるライブアイゲンシャフト—特に結婚制限について—」『阪大法学』135(1985 年)、123-167 ページ；同「15-16 世紀ドイツ＝スイス地域における死亡税—『西南ドイツ型』ライブアイゲンシャフトに関する一考察—」『阪大法学』143(1987)、147-189 ページ；野々瀬浩司『ドイツ農民戦争と宗教改革—近世スイス史の一断面—』(慶應義塾大学出版会、2000 年)、125-323 ページを参照。なお三成氏は「ライブアイゲンシャフト」、野々瀬氏は「農奴制」の語を用いている。

3 野々瀬、前掲書を参照。本稿で扱う村落ブラッテンンに関しては、1525 年の農民戦争時に農民が抗議書第 1 条で「体僕制からの解放を第 1 に望む。自分たちは隷属民ではないと多くの者が考えているからだ。」と訴えていることから明らかである。Emil Dürr(Hg.), *Aktensammlung zur Geschichte der Basler Reformation in den Jahren 1519 bis Anfang 1534*, Basel 1921, S. 254.

4 Dorothee Rippmann, *Unbotmäßige Dörfler im Spannungsverhältnis zwischen Land und Stadt*. in: Ulrich Pfister(Hg.), *Stadt und Land in der Schweizer Geschichte*, Basel 1998, S.110-156; Dorothee Rippmann, *Herrschaftskonflikte und innerdörfliche Spannungen in der Basler Region im Spätmittelalter und an der Wende zur Frühen Neuzeit*. in: Mark Häberlein(Hg.), *Devianz, Widerstand und Herrschaftspraxis in der Vormoderne*, Konstanz 1999, S.199-225; Dorothee Rippmann, *Gemeinde im Widerspruch: Soziale Unrast und Bauernruhen*. in: *Nah dran, weit weg*, Bd.2, Liestal 2001, S.197-212. 以下、事実関係に関する記述はリップ

マンによる。田中俊之「中世末期の北西スイスにおける領主・農民間紛争の展開—村落ブラッテルンの場合—」『北陸都市史学会誌』14(2008年)、1-13 ページ、同「15世紀北西スイスの都市・領主・農民—バーゼルの領域形成をめぐる権力関係—」踊共二・岩井隆夫編『スイス史研究の新天地—都市・農村・国家—』(昭和堂、2011年)142-162 ページも参照。

5 Rippmann, Unbotmäßige Dörfler, S.134; Rippmann, Gemeinde, S.205.

6 ブルクレヒト契約についてはさしあたり、Peter Blickle, Friede und Verfassung. in: Historischen Verein der Fünf Orte(Hg.), *Innerschweiz und frühe Eidgenossenschaft*, Bd.1, Olten 1990, S.134-156 を参照。ブリックレによれば、都市は近隣の貴族、修道院、農民等に市民権を与え、租税や軍役を負担させる代わりに保護を保証した。この双務契約＝ブルクレヒト(Burgrecht)を通じて、都市は農村への影響力を強め、領域形成の基盤とした。

7 Rippmann, Unbotmäßige Dörfler, S.136; Rippmann, Gemeinde, S.205.

8 本稿では立ち入らないが、身分名称として「体僕」(Leibeigene)と「庇護民」(Hintersasse)は区別される。ウルブリヒは上部ライン地域について両者を史料から区別することはできないとしている。Ulrich, *Leibherrschaft*, S.236. 他方、リップマンはブラッテルンの体僕 90 名、庇護民 29 名を区分し、大多数の名前も明らかにした。Dorothee Rippmann, *Das Dorf und seine Menschen*. in: *Nah dran, weit weg*, Bd.2, S.126f.

9 筆者は以前に本往復書簡の活字化を試みたことがあったが、そのことを本稿執筆途中まで失念していた。前稿で不明としながら本稿で解消した部分、史料の文脈で解明できた部分を、今回は可能な範囲で反映させた。前稿は、田中俊之「15世紀体僕制紛争をめぐる都市・領主間の往復書簡—バーゼル農村邦国立公文書館所蔵史料より—」『金沢大学歴史言語文化学系論集 [史学・考古学篇]』2(2010年)、143-178 ページ。

10 アールガウ占領以降のスイス、ハプスブルク家に関する近年の研究として、Peter Niederhäuser(Hg.), *Krise, Krieg und Koexistenz: 1415 und die Folgen für Habsburg und die Eidgenossenschaft*, Baden 2018.

11 バーゼルの領域形成についてはさしあたり、Dorothee Rippmann, *Bauern und Städte: Stadt-Land-Beziehungen im 15.Jahrhundert*, Basel/Frankfurt am Main 1990, S.144-154; Mireille Othenin-Girard, *Ländliche Lebensweise und Lebensformen im Spätmittelalter*, Liestal 1994, S.193f., 196f. を参照。

12 シスガウ・ラントグラーフシャフトについては、Walther Merz, *Die Burgen des Sisgaus*, 4 Bde., Aargau 1909-1914 を参照。

13 19世紀以来、対ハプスブルク闘争史観がスイス史の骨格をなしてきたが、そこからの脱却ならびに地域の視点を模索し始めたのは、比較的近年のことである。さしあたり、Peter Niederhäuser(Hg.), *Die Habsburger zwischen Aare und Bodensee*, Zürich 2010 を挙げておこう。

14 第537巻は綴じ冊子8冊から成るが、全体に通し番号が付されており、計220ページに及ぶ。内容はほぼすべてバーゼルとハンス・ベルンハルトにかかわる都市・領主間紛争である。バーゼル農村邦国立公文書館の所蔵史料、および第537巻の内容については、田中俊之「15世紀後半バーゼル農村部におけるハプスブルク系在地貴族—未刊行史料の活字化と分析—」『金沢大学歴史言語文化学系論集 [史学・考古学篇]』6(2014年)、103 ページ以下を参照。

15 本稿史料註の冒頭部*の第2段落の説明を参照。

16 Heinrich Boos(Hg.), *Urkundenbuch der Landschaft Basel*, Bd.2, Nr.866, S.1024f. の7月15日付文書がそれであろう。

17 クレヴィンは村落内に家と土地を持ちながら領主に人頭税も支払わず、賦役も行わず、実際にはバーゼル領ヴァルデンブルクに居住し、バーゼルに納税するのは「転用」だということ。

18 上級裁判権については、*Nah dran, weit weg*, Bd.2, S.227 を参照。

19 隣人関係に関しては、都市共同体内が対象の議論だが、Pascale Sutter, *Von guten und bösen Nachbarn: Nachbarschaft als Beziehungsform im spätmittelalterlichen Zürich*, Zürich 2002 を挙げておこう。

20 Boos(Hg.), *Urkundenbuch*, Bd.2, Nr.871, S.1027f. の2月25日付文書(具体的内容は欠如)がその可能性がある。

21 本拠地オーストリアから見て西方のスイス北東部からアールガウ、エルザスにかけての一带を前方オーストリアと呼ぶ。1415年以降の前方オーストリア政策については、Dieter Speck, *Kleine Geschichte Vorderösterreichs*, Karlsruhe 2010, S.75ff. を参照。

【凡 例】

1) 大文字、小文字、「/」印は史料の記載どおりに記した。史料にはカンマ、ピリオドはなく、文の切れ目、文節の切れ目と、大文字、小文字、「/」印との関連性はない。筆者の推測では、「/」印は同時代人が本複写作成時に確認のためにチェックしたものにすぎないように思われる。

2) 史料中の単語にしばしば「ひげ」印が付されているが、これは省略記号であり、適宜 [] で補った。

3) u と v, a と o と e, i と j, I と J などの見分けは難解であり、厳密に区別できていない。

4) s は f と s とを史料のとおりに区別した。jz と β の区別は厳密ではない。

5) 挿入箇所は ^ 印 2 つで挟み込んで示した。

Wir Anno von Sezenfels Ruter/Singermeyer und der Rute
 zu Basel/ Und künnt menglichen mit diesen brieffe alle Lieblich
 Rutzlich der unser londe dem Erwungen hant/ Sezenhaeren von Springen
 Ruter ze Brattelen gefessen/ gelbesen/ und aber nu zu ons her in den
 Basel gezogen ist/ Der benant her Sezenhaer nu auch von erlicher/ vor-
 sach/ weger/ das si ze Brattelen verbotten/ und in geurtre gezogen hatt/
 habent vor durtz unsere erbere Parssumde/ nomlich/ perer Sibonkin-
 Sezenhaeren von Wuffen/ und Clausen/ von andlo/ solach/ Epemne so durtz
 men gelbesen/ sint gutlich ubertrogen/ lassen in massen her nachgeschriben
 hat dem ist also/ Das alle die runde Clewin Rutzlich der unser
 by mit zu Basel gefessen/ in solte wolte/ das er dem si in Wuffen
 so in haben/ moege/ doch das die als andere/ her Sezenhaer lute in
 Sauren/ und durtz solle/ wurde aber Clewin Rutzlich bezeugt/
 wider ander her Sezenhaeren/ jen Brattelen ziehen/ ad dem sol er her
 Sezenhaeren/ und siener erber/ durtz und thun nach Inhalt des uber-
 trages der Trau/ dem selben her Sezenhaeren/ und ons odernals
 gemacht/ und bescholt worden ist/ als des selben her Sezenhaer lute
 in unseren Impetoren gefessen/ ons/ und unsem Impetoren/ wird die
 weder Winne noch wurde zu Brattelen messen/ dem allem so
 er do offer/ siener gutere/ Rate tun muess/ durtz auch wol thun mag
 mag auch der Rute siener gutere/ wol fueren und legen/ was in das
 Binder/ Auch sol der benant Clewin Rutzlich/ wegen unge-
 vermogte tun/ aber er in groeßere roecher die sich her Sezenhaeren von Springen
 empfienbet hat/ In wider zu hant/ klingen moege/ Dagegen mag
 der benant her Sezenhaer siener recht/ so er off Clewin Rutzlich gut/ das
 er in verbotten/ und in geurtre gezogen/ siener genommen hatt/ wol fueren/ doch
 also ob in gegen Clewin Rutzlich mit recht/ vort/ erkennen werde
 das das zu ons von Basel hinsten/ solle in vort/ oder nutz/ darumb her
 zeinde/ wolte/ auch her Sezenhaer von Springen/ desselben/ Lieblich Rutz-
 lich/ und/ londen/ eins/ oder me zu der heiligen/ er bezeugt/ verspiger/
 Da zu sol er Clewin Rutzlich/ auch lassen beuiffen/ und das mit siener
 willen/ verhandelen/ und uff/ und mit solichem/ ubertrage/ solent/ her
 Sezenhaer/ und auch Clewin Rutzlich/ durtz alle/ durtz gangene/ Epemne/ und
 facten/ londen/ facten/ bis uff/ durtz durtz durtz/ und gar geurt/ und
 gepflucht/ son das so auch zu beder/ foren/ by/ tuelben/ zu/ ziden/ statt/ besal-
 rende/ und zeinde/ gelopt/ und/ nach/ londen/ als die benant/ unsere/ Parssumde
 ons/ das/ nach/ acht/ hant/ das/ zu/ vorkunde/ haben/ von/ den/ si/ durtz
 runde/ londen/ moege/ unser/ Statt/ Secret/ Inge/ sigel/ lassen/ hant/ londen/ auch/ son
 off/ siener/ Rute/ und/ unsem/ nach/ londen/ siener/ hant/ durtz/ durtz/ durtz/
 off/ siener/ Rute/ und/ unsem/ nach/ londen/ siener/ hant/ durtz/ durtz/ durtz/
 off/ siener/ Rute/ und/ unsem/ nach/ londen/ siener/ hant/ durtz/ durtz/ durtz/

Wir Hanns von Berenfels Ritter / Burgermeister vnd der Rate
 zů Basel / Tund kunt¹ menglichem² mit difem brieffe / Als Clewin
 Rützfchij der vnser / unde[r] dem Strengen h[er]rn Bernharten von Eptingen
 Ritter ze Brattellen geseffen gewesen vnd aber nu³ zů vns her in⁴ gen
 5 Basel gezogen ist / der benant her[r] Bernhart Im ouch von ettlicher⁵ / vr=
 sach wegen das sin ze brattelen verboten / vnd In gerichte gezogen hatt /
 habent wir durch vnser erebere Ratffrunde⁶ / nemlich / Peter Schonkint
 Bernharten von Louffen / vnd Clausen von Andlo / solich Spenne⁷ so Zwufche[n]
 Inen gewesen sint gutlich ubertragen⁸ laßen / In massen her nach⁹ geschriben
 10 stat dem ist also / Das alle die wile¹⁰ / Clewin Rützfchin der vnser
 by vns zů Basel geseffen sin solle wolle / das er denn sin huffrowen¹¹
 By Im Haben / moge / doch das die als¹² andere / her[r] Bernharts lute Im
 Sturen¹³ vnd dienen solle / Wurde aber Clewin Rutzschy keynest¹⁴ /
 wider¹⁵ vnder her[r] Bernharten gen Brattelen Ziehen / alfdenn¹⁶ sol er her[rm]
 15 Bernharten vnd sinen erben / dienen vnd thün nach Innhalt des uber=
 trages¹⁷ der Zwufchent dem selben her[rm] Bernharten vnd vns vormals
 gemacht vnd verfigelt worden ist / als des selben her[rm] Bernharts lute
 In vnseren Empteren¹⁸ geseffen vns vnd vnsern Amptluten / tünd die
 wile er aber also nit vnder Im geseffen ist / so sol er mit finem viehe
 20 weder wunne¹⁹ noch weide / Zů Brattelen nyessen²⁰ denn allein so
 er do vsßen finen güteren Rate tün muß das er ouch wol thün mag
 So mag er sine Rosse die er da zů bruchet²¹ / Wol da selbs weyden²² / Er
 mag ouch den Roube²³ finer gütteren wol fueren vnd legen wa²⁴ Im das
 eben ist / Her Bernharts halb²⁵ vnd menglichs von finen wegen vnge=
 25 hindert / Ouch sol der benant / Clewin Rützfchin allen finen flüße²⁶ vnd
 vermoge tün / obe²⁷ er sin größere tochter die sich her Bernharten von Eptinge[n]
 empfredet²⁸ hat / Im wider zů handen bringen moge / Dagegen mag
 der benant her[r] Bernhart sin recht so er vff Clewin Rützfchys güt das
 er Im verboten vnd in gerichte gezogen furgenomên²⁹ hatt / volfueren³⁰ doch
 30 also / ob Im gegen / Clewin Rutzschy mit recht vtzit³¹ erkennet werde
 das daz zů vns von Basel hinstant³² solle Im vtzit oder nutzit³³ darumb heische[n]
 Ze tünde / wolte ouch her Bernhart von Eptingen deffelben / Clewin Rutz=
 schi[n]s ~~ouch~~ kynden eyns oder me zů der heiligen ee³⁴ Keynest versorgen
 da zů sol er Clewin Rützfchi ouch laßen berüffen vnd das mit finem
 35 willen verhandelen / vnd uff vnd mit sollichem / vbertrage sollent her[r]
 Bernhart vnd ouch Clewin Rützfchij umbe alle vergangene Spenne vnd
 sachen ~~vnd fachen~~ bis uff datu[m] difes brieffs gantz / vnd gar gericht vnd
 geschlicht sin das sy ouch zů beden³⁵ syten by truwen³⁶ an eyden statt zehal=
 tende³⁷ vnd zetünde³⁸ gelopt vnd versprochen / als die benan[ten] vnser Ratffrunde
 40 vns das furbracht³⁹ handt / Des zů urkunde habent / wir von Ir beder
 teyle bitte wege[n] vnser Statt Secret Ingefigel laßen hencken an difen
 brieff doch vns vnd vnsern nachkome[n] Iren halb one⁴⁰ schaden / Geben
 vff sant Peters / den Ersten tag Im Ougsten Als man zalt nach Christi⁴¹
 vnser her[rm] geburt Thusent vierhundert Sechzig vnd funff Jare etc. ⁴²

an Dingen her
geten von Springen
Lette

und weilich dienst bevor lieber her Bumbach
des von Flouckhufser der vnyste uff gester
vor vnuß gedreht und nach allesthe vnde on ende ge-
pogden sint Haben vor sich mit Flouckhufser
verhofft das er selbe sich zu seiner freyheit frey und allen
schiff tun pöte ob er sin tochter zu inoren henden bringer
möge Jons selbe schiff so er glimplich verhande bringer
Da vor Hoffen er werde dem nach gan, Dauff so
begere vor an sich mit auf betende das er sin sin zu frey
und kinder ledig zu sin tochter lassen wöllent Das begere
vor zu der billigkeit sin übertrage nach demort und
ich gutlich so bedienas Jons des inore außset bi di-
sin tocher Haben uff Dinstag den 17. d. May Juno 1579

Ligo

Und von Bumbach
Bumbach her den 17. d. May
zu Basel

lieben gud, moß dem inore vor gut mit voreffriden gatt
Flouckhufser gals, Vor demit im voreffriden sig die toch-
ter zu freyheit und sin selb so bringer ob er si zu inoren henden
den bringer möge, und so die glimplich verhand bringer

*Dem Strengen her Bern=
harten von Eptingen
Ritter /*

Vnns[er] willige dienft bevor⁴³ Lieber her Bernhart /
 5 als Ir und Clewi Rütfschi der vnnsfer / uff gester
 vor vnns gewesen / vnd nach allerleij rede / on ende ge=
 scheiden sint haben wir sovil⁴⁴ / mit Clewin Rütfschin
 verschafft⁴⁵ daz er selbs sich zu finer swejster fügen vnd allen
 vliß tün solle ob er sin tochter zü ûwern⁴⁶ handen bringen
 10 möge / vnd solichs vlißes sol er glöuplich⁴⁷ vrkünde bringen
 Da wir hoffen er werde dem nach gan⁴⁸ / Daruff so
 begeren⁴⁹ wir an ûch⁵⁰ mit ernst bittende daz Ir Im sin huffrowen /
 vnd kinde ledig⁵¹ ^vnd^ zü Im komen lassen wellent / Daz begeren
 wir zú der billichkeit / dem ûbertrage nach dennoch⁵² umb
 15 ûch gütlich ze verdienen / vnd des ûwer antwort bij di=
 sem botten⁵³ Geben uff Donstag vor Martinus Anno etc. ⁵⁴
 Lxv ⁵⁵

*Hanns von Berenfels Ritter
Burgermeister vnd der Rate
zê Baifel*

20

Lieben h[er]rn / noch dem ûwer wijtheit⁵⁶ / mir verschriben hatt /
 Clewin Rütfschlis⁵⁷ halb / wie damit Im verschafft sig⁵⁸ / die toch=
 ter zu fügen / vnd sin fliß ze bringen / ob er sij zú minen han=
 den bringen móg / vnd sol des glöuplich vrkund bringen /

das er zu letzen vorgangen sig demuff in der weyheit be-
 greiffen sin wip, und kind ledig zu lassen, ad fristestigen neu:
 sulichen gut, wovon uns zuverlassen kon, das davor die
 weylich sin, was in dem tag des, mit vol genim tou, dann
 wie die die muere, in fluch, ob die tochter zu minen gen.
 der son, sonnd nur die tochter entfamt, wann aber
 die tochter zu minen gunden, dann brogt, vort, weil die
 dann zuverlich sin, des genanten, Clavis wip, in der ge-
 uanngiss zu lassen, Das aber das mit bestreigt, und
 Claus verkind bringe, sine verhoff, p. p. d. d. ^{subalt} demingem sin
 was im galt des uberzagt, und sine bestigen, ob die
 tochter se muere ledigen wolt, sond se so lang begaltem,
 biff so bestreigt, als die das von billigen, ein purg, noch
 son se, und se tochter, min lid eigen sind, das sin d. d. p.
 und der gesozfamt, sich bewirft, ein wip zu minen,
 p. weil die in, in der geniggen lassen, und die bott, p. im
 von wie prapudig, auch von bogt, sin id, gebotten
 werden die se becargt, und mit gebaltem gatt, sind geb
 ein beduren, das in der weyheit, sich, weil muere, von der
 von demigen, liden, d. d. d. als se sich, in der d. d. d. d.
 bewirft, als in der weyheit, gesozfamt, vort se muere, offen-
 lich, was uns, gesozfamt, die geb, in der d. d. d. d. d.
 genant, und in prapudig, was, das mit, in der fluch, ist,
 Das er wollest, ein, als amide, auch als, bestreigt, vort,
 das er geniggen, was die muere, in d. d. d. d. d. d. d.
 in der weyheit, vort, son, in der d. d. d. d. d. d. d.
 als die, d. d. d. d. d. d. d. d. d. d. d. d. d. d. d. d.
 genant, gatt, er, d. d. d. d. d. d. d. d. d. d. d. d. d.
 vol geniggen, Do er aber, das wollest, mit sin, vort, was
 billig, das er, dann, sich, dann, d. d. d. d. d. d. d. d.
 belagt, und die, d. d. d. d. d. d. d. d. d. d. d. d. d. d. d.

daz er semlichen⁵⁹ nochgangen sig⁶⁰ doruff ûwer wijheit be=
 gert fin wip / vnd kind ledig zûlassen / etc. ⁶¹ fürfichtigen⁶² wij=
 sen lieben h[er]rn wo Ich ûch zuwillen ston⁶³ könd⁶⁴ / da wölt Ich
 willig fin / wen In dem daz Ich nit wol getün kan / dann
 5 wie Ich die müter⁶⁵ / uffließ⁶⁶ / ob die tochter zû minen han=
 den këm / so wurd mir die tochter entfrömt / wann aber
 die tochter zû minen handen ~~komen~~ brocht wirt / wil Ich
 darinn gütwillig⁶⁷ fin / des genanten Clewis wipp / uffer ge=
 vängniß zû lassen wo aber das nit beschicht⁶⁸ vnd
 10 Claus vrkünd bringt / fins vliß / so sol Ich ^fin halb^ benügsam⁶⁹ fin
 nach Innhalt des übertrags vnd finer befechen⁷⁰ / ob die
 Tochter Ir müter ledigen wolt / vnd sy so lang behalten/
 biß es beschicht / als Ich das von billichem tün mag / noch
 dem sy / vnd Ir tochter / min lib eygen⁷¹ find / des sünshalp⁷²
 15 Wen[n] der In gehorsame sich bewijt / ein wip zû nemen /
 so wil Ich In / ûwer genießen lassen / vnd die bott / so Im
 von mir personlich / ouch vom vogt/ bim eid/ gebotten
 wurden / die er beracht / und nit gehalten hatt / vnd hab
 ein beduren⁷³ / daz ûwer wijheit / sich sovil mügt von der
 20 unbenuigen⁷⁴ lûten wegen / als sij sich zûvil / In vnbilligkeit
 bewisen / als ûwer wißheit / gehört hatt / wie er mich offen=
 lich vor ûch geschuldiget⁷⁵ / Ich hab In von Brattellen mit
 gewalt / vnd on recht vertriben / daz nit / an Im selb Ist /
 Hett er wellen tün als annder / ouch als / betedinget⁷⁶ was /
 25 daz er thün folt / was die minen / In waldemburger ampt /
 ûwer wijheit tetten / do Im minder angemüet⁷⁷ wart /
 als sich dornach befand⁷⁸ / noch Innhalt / der brieff dorüber
 gemacht hett er do bij wellen bliben / wer min will /
 wol gewesen / Do er aber des willen / nit fin wolt / was
 30 billich daz er dann sich dannen têt / Ouch als er sich /
 verlagt⁷⁹ / vnd die vnworheit⁸⁰ bringt / Daz Ich In loß⁸¹

unzer angelen des unzer weyheit wold/ vnderzigt mag sin
 dunt die boten si das ubertziges dages in and sin vor p/
 vnd kinder abtress dommo des sin weyheit gant de
 mit vnder zuffig pfundes mit/ zuffal bedent worden vnder
 Do mit groisse vnt hett er unzer weyheit mit groisse vnt wey
 dunt siner vollen mit huffen/ vnt gungt vnt sin er
 mit mit dunt vnt/ als ein kinder off das er dunt von
 Brattellen gungt vnt zu Brattellen sin vnt siner/ vnt
 gungt gaben ist. Dunt er zu Brattellen gungt/ vnt
 malen/ oder an ein vnt/ vnt siner/ oder zu Brattellen/ zu
 Brattellen gungt vnt gungt vnt. Das er mit groisse
 Dunt er zu Brattellen mit malen/ vnt gungt/ vnt mit
 gungt vnt mit vnt/ sin ubertzag/ mit fort siner
 als vnt vnt als vnt. Das er mit vnt/ vnt vnt vnt
 dunt vnt abtress an unzer vnt/ vnt vnt vnt
 dunt siner sin vnt vnt/ vnt gungt mit vnt vnt
 sin/ vnt sin vnt vnt vnt/ vnt vnt vnt
 vnt/ vnt sin vnt vnt vnt/ vnt vnt vnt
 Das er vnt vnt vnt vnt/ vnt vnt vnt
 Do vnt vnt/ vnt vnt vnt vnt/ vnt vnt vnt
 vnt vnt vnt vnt vnt/ vnt vnt vnt

Dunt vnt
 von vnt

Dunt vnt
 von vnt

Dunt vnt
 von vnt

ûwer engelten⁸² des ûwer wijheit wol / vnd errricht mag fin /
 durch die botten / so das ûbertrügen / daz Ich Im / vnd fin wip /
 und kinden abließ dorumb Ich sij In recht genômen hatt do /
 mir vnder Driffig pfunden nit / zûfal bekent worden wër /
 5 Do nit zwifel Ift hett er ûwer ~~wijheit~~ nit genoffen es wër
 durch finen willen nit beschëen / ouch gemacht wart / fit er
 mir nit dienen wolt / als ein hinderseß⁸³ / daz er dann von
 Brattellen hiechen⁸⁴ / vnd zû Brattellen kein eigen für / noch
 hushabung haben sölt / Sunnder⁸⁵ zû Bafel bachen⁸⁶ / vnd
 10 malen⁸⁷ / oder an eim wirt⁸⁸ / toft⁸⁹ nêmen ob er zû Brattellen zû
 Buw⁹⁰ finer güteren bruch⁹¹ haben wolt Daz er nit geton hatt /
 Sunnder zû Brattellen mit malen / vnd bachen ouch mit
 holtz vnd mit annderem / so Im ûbertrag / nit statt⁹² fin bruch
 als wol gehatt als annder / Do Ich nit wart⁹³ daz solich entföm=
 15 dung⁹⁴ vnd abbruch an ûwerem vngelt gestatt⁹⁵ wurd / Ich
 ouch fürer Im sölich bruch vnd hußhabung nit me gestatten
 kan / vmb fin ûwer bewijfung willen / Ich bitt ouch ûwer
 wijheit / solichs gen mir / In argem⁹⁶ nit zû vermercken⁹⁷ / dann
 wo Ich willen vnd dienft / ûch bewisen könd oder möcht
 20 do wölt Ich allzitt willig fin etc. ⁹⁸ / Geben vff Sambstag
 vor Sannt martinus tag Im Lxv Jar

Hannßbernhart
 von Eptingen etc. ⁹⁹

Dem Strengen h[er]rn Bernhart
 25 von Eptingen Ritter

Vnns[er] willige dienft bevor Lieber Her Bernhart

ûwer ſchriben vnns / Als von Clewin Rütſchins des vnn=
 fern wegen ijetz zügefant¹⁰⁰ habent wir verſtanden vnd nimpt
 vnns / die eben¹⁰¹ ſchimpfflich¹⁰² vnd frömde¹⁰³ / vnd wöllent wol
 daz Ir / den ûbertrage anſeent / vnd die frowen / als derſelb ûber=
 5 trage wiſet Irem man volgen gelaffen hettent / denn die frowe
 darinne nieman¹⁰⁴ gemeldett ſtat¹⁰⁵ / daz ſij ûch¹⁰⁶ die tochtër ſölle
 zü handen bringen / oder hafft¹⁰⁷ für ſij ſin / So zühent Ir ouch
 mëngerleij In / das Ir meijnent / dem vnnferm nit me / züge=
 ſtatten / ſo er ſin güter bûwen ſol / ûber das der ûbertrage wiſet
 10 daz er mit ſinem zuge¹⁰⁸ / ſine gütere buwen / vnd den wube¹⁰⁹
 davon nēmen möge / vnd führen wohin Im das eben ſin
 Darinn Im ouch billich erlobet¹¹⁰ Iſt / bachten / malen / vnd
 das Im / zü libſnarunge¹¹¹ notdurfftig Iſt / Als Ir / ſo Ir ûch
 recht bedenckent / ſelbs wol verſtand billich ſin / Wie aber
 15 dem allem So vorderent vnd begerent wir an ûch / mit
 dirre geſchriſfte¹¹² mit ernſte / daz Ir dem benannten Clewin
 Rütſchin dem vnnſeren / ſin huffrowen / one engeltniffe / uß
 gefengkniffe vnd volgen laſſen ouch fürer / mit Inen beden
 dhein nûwerunge¹¹³ / me fürnēmen¹¹⁴ / Sunnder ſij nach Inn=
 20 halt des ûbertrages bliiben laſſen wöllent / denn ſölte ſolichs
 nit geſcheen ſo hettent wir / das ije / nit gern / vnd mü=
 ſtent gedencken¹¹⁵ ouch darzü ze tünde / als ſich geburt / vnd
 des ûwer antwurt / mit diſem botten Geben vff Samb=
 ſtag vor Martini Anno etc. ¹¹⁶ Lxxv to 117

Hanns von Berenfels Ritter
 Burgermeiſter vnd der Rate
 zü Baſel

Nachdem ûwer wiſheit mir yetz zwuren¹¹⁸ geſchriben

hat Clewin Rütſchins wips vnd funs halp doruff Ich úwer
 wiſheit / uff ijeglichen brieff ein antwurt zúgeſant hab /
 Do Ich truwen¹¹⁹ von úch benúgsam ſig / vnd wer ſich der
 frowen / vnd des knechts an nemen well / Im kunt mir
 5 für / wie Clewi Rütſchi / ettwas trüwert bruch / ouch der frowen
 farnd¹²⁰ verbotten hab / nit von Iren Wegen züreden / Dann
 er Woll / lib vnd gút daran ſetzen des Ich nit beſorg wie Wol
 ſölich ^ſine^ wort nit billich beſcheen ſitt Ich glicher billicher recht
 urbüttig¹²¹ bin / ouch ſin wip vnd kind / min lib eügen ſind
 10 vnd mit In nit anders handel dann Ich noch der
 billichkeit zü tünd hab / vnd das wider den úbertrag nit Iſt /
 vnd ob aber Clewin oder ijeman vermeinen¹²² wolt / daz
 Ich dowider thëtt / der mag der glichen billichen bott / ſo Ich
 geton hab / Im nechſten brieff beſtimpt eins uffnëmen / vnd
 15 do beſehen¹²³ laſſen / ob wider den úbertrag geton werd / Deſglich¹²⁴
 ſo wil Ich den knecht der frowen ſün / für recht ſtellen / vnd
 Im do beſcheen laſſen was recht gitt¹²⁵ nach ordnung keyſer=
 lichts rechten¹²⁶ / do Clewi noch nieman dowider / noch der
 billichkeit / tün ſol / noch mag / ſitt er In minen Hohengerich=
 20 ten umb verwúrckung¹²⁷ gevangen Iſt / vnd das wirt¹²⁸ be=
 ſcheen umb das Clewi vnd menglich ſehen / Daz Ich nit
 anders handeln wil / dann recht Iſt / do Ich nit getruw¹²⁹ daz
 Im oder ijeman von úwer wiſheit geſtatt oder verhengt
 werd / dowider zütünd / Ob er aber ſo untûr¹³⁰ ſin wolt /
 25 vnd dorin vnd an den Rechtbotten von mir beſcheen / ver=
 achtung thett oder thun / Wolt daz dann Im von úwer wiß=
 heit vnd von allen den / ſo úch / zü verſprechen ſtond / Hilff /
 vnd Rott / ſchirm vnd enthaltniſſe¹³¹ ouch biſtand¹³² abgeſchla=
 gen werd / vnd mir / vnd wen Ich darzü brüch¹³³ / das
 30 geſtatt wërd / vnd kein Irrung¹³⁴ beſchëch¹³⁵ dem wider ſtand
 zü tünd / wo er ſölich recht ~~fúchen~~ ~~furechen~~ ^ſchriben^ wolt / wo
 aber In / oder ijeman anders der ſich der frowen vnd
 des knechts annemen wolt / nit bedunckt / daz Ich rechts

güing gebotten hett / der mag mir / recht bietten / oder Ich
 wil Im me bietten / vnd bitt ûwer wijheit / mit fliffigem¹³⁶
 ernft / vff daz mit Clewi Rütfschi zu verschaffen oder wer
 dowider thün wolt / femlichem min herbietten¹³⁷ / nit ufze=
 5 gend / des wil Ich allzitt gütwillig fin / umb ûwer wiß=
 heit ze verdienen / Des ûwer antwurt Geben vff /
 Sannt Martinus tag Im Lxv Iar /

Diß Ist ~~ein~~ ~~zed~~ Inhalt eins zedels¹³⁸
 In der nechstgeschribnen mißiwen¹³⁹
 10 beslossen¹⁴⁰ gewesen

Lieben h[er]rn als ûwer wijheit / mir nechst / vor diser ge=
 schrift geschriben hatt / deruff Ich ûch geantwurt hab / Dorin
 ûwer wißheit / nützit vnzimlich¹⁴¹ von mir verstatt¹⁴² / Do
 aber ûwer wißheit / min fürnemen¹⁴³ / hoch verfocht¹⁴⁴ / mit
 15 Stränger vorderung / die minen¹⁴⁵ / ^ledig^ Zu lassen / daz Ich
 nit schuldig bin / ouch der übertrag / mich sowitt¹⁴⁶ / nit bin /
 vnd hett wol getruwt Ich wûrd von ûch / so wit nit
 erfücht sit Ich billicher recht vor ûwer / Wijheit / vff min
 gnädigen h[er]rn von Basel urbüttig¹⁴⁷ gewesen bin / oder wo daz
 20 von billicherem hinhören wer sit aber ûwer wijheit
 den übertrag ouch min fürnemen / ~~oder~~ anders ver=
 mercken¹⁴⁸ wellen / dann Ich trûw¹⁴⁹ daz der übertrag Inhalt
 mich dheinerlëy¹⁵⁰ Irren / an dem minen so bût¹⁵¹ Ich ûch oder
 wer sich der frowen / oder des knaben / annemen¹⁵² wil recht
 25 vff / min gnädigen h[er]rn / von Basel / oder uff finer gnaden
 Official¹⁵³ der des gantzen Bistums / geordneter Richter
 Ist / wo aber das ijeman / nit genügsam beduncken wolt
 so bût¹⁵⁴ Ich es zûkomen ^zû recht^ vff min gnädigen h[er]rn / den

Marggauen, von nideren hiden oder off minen gnedigen
 guden Marggauen von Kottley, oder off siner guden
 Lutenogt bei Hungen von Glesland, oder off minen
 gnedigen guden von Bupman, oder off minen gnedigen guden
 Beuff Jwahl von Tresten, oder off minen gnedigen
 guden von Sappoton, oder off Segulegriff und fort zu
 Bey, oder off Berymenisee und fort zu Zurich, oder off
 Segulegriff und fort zu Solmen, oder off Segulegriff und
 fort zu Luzern, oder off gemein Edgenossen, oder off mi-
 neren gnedigen herrenschafft von Schwyz, od Lamsach und
 fort do es billiger sich genozet word, dann als besuget
 nach dem die, vnder minen gnedigen herrenschafft von
 Schwyz, et sic, und so zu verprechen stand, und talio,
 das der freyheit eines von mir uffgenomen word, oder
 gelassen, vnangetruet von inder freyheit, und den
 inderen, und dit do es inder freyheit, mit festigen eydt
 mir, an den minen, vngestindert, mich, mich, zu dem
 minen, zu lassen, mich den inderen, vnder sines recht
 von mir furzunemen, gefatten, mich, sies, mit eydt
 fundet, der freyheit, mich, uffnemen, ob es vnangetruet
 deret, lassen, mit, blick, mich, zu, Boden, off, Boden,
 tag, vor, dem, Mittwoch, im, 1500, 102

Auch ob inder freyheit, oder vnangetruet, der frey-
 heit, von, dem, Knaben, gals, mir, vnangetruet, wolt, das
 es, diese, recht, gungelton, hat, der, mag, mich, recht, blick
 ist, dann, das, so, zu, nlichen, und, billiger, von, mir, uff-
 genomen, vreden, und, gemein, sines, sind, dann, die, mich,
 so, mit, recht, der, blick, hat, gungelton, untruet, doruff,
 geben

Marggraven von nidern baden oder vff minen gnädigen
 h[er]rn den Marggraven von Rötteln / oder vff finer gnaden
 lantvogt / her Hannsen von Flachland / oder vff minen
 gnädigen h[er]rn / von Bußnang / oder vff minen gnädigen h[er]rn
 5 Graff Oßwalt von Tierstein / oder vff minen gnädigen
 h[er]rn von Rappoltstein / oder vff Schultheiß vnd Rott zü
 Bern / oder vff Burgmeister vnd Ratt zü Zürich oder vff
 Schultheiß vnd Ratt zü Soloturn / oder vff Schulth[ei]s vnd
 Rot zü Lutzern / oder vff gemein Eidgenossen / oder vff mi=
 10 ner gnädigen her schafft von Ötterrich etc. ¹⁵⁵ Lantvogt vnd
 Rött do Ich billicher für gevordert¹⁵⁶ wurd dann also besücht
 noch dem Ich vnder miner gnädigen her schafft von
 Ötterrich etc. ¹⁵⁷ / fitz¹⁵⁸ vnd Ir zü versprechen stand / vnd trûw
 daz der Rechtbott eins / von mir vffgenommen wêrd odêr
 15 geloffen / vnangevordert / von ûwer wijheit / vnd den
 ûweren / vnd bitt do bij ûwer wißhheit mit flißgem ernst
 mich an den minen vngehinderet / ouch mich by dem
 minen zü lossen / ouch den ûweren / wider sölich rechtbott /
 gen mir fürzünemen gestatten / ouch selbs nit thün /
 20 funnder der Rechtbott eins vffnemen ob Ich vnangevor=
 deret erlassen nit bliben mag etc. ¹⁵⁹ / Geben vff Somse=
 tag¹⁶⁰ vor Sannt Martinus tag Im Lxv Jor

Ouch ob ûwer wijheit / oder ijeman annders / der fro=
 wen / vnd knaben halb / nit vermeinen wolt / daz
 25 Ich gliche / recht / gnüg/botten¹⁶¹ hêtt / der mag mir / recht bietten
 Ist dann / daz sij zu vliches / vnd billicher von mir vff=
 genommen / werden / vnd gemein funder find dann die min
 so wil Ich noch der billichkeit / gnügsam antwurt doruff
 geben

*Dem Strengen hern Bernharten
von Eptingen Ritter*

Wir uns[er] willige dienst bevor lieber her Bernhart / Als
 Ir vnns von Clewin Rüttschi des vnnsfern wegen
 5 vff vnnsfer letst schriben / zwei brieffe zügefant vnd dar=
 rinne nach wenigerleij Inzügen¹⁶² / die vnns für ware¹⁶³ / eben=
 schimpfflich vnd nit vil zü güter / nachburschafft¹⁶⁴ die=
 nende / beduncken¹⁶⁵ sin / gemeldet vnd mengerhand¹⁶⁶ Recht=
 bott fürgeschlagen vnd aber dabij nit destminder¹⁶⁷ / des
 10 armen knechts huffrowen wider den übertrag In geveng=
 nisse hand / Do Ir selbs wol verstand / daz umbillich
 wëre / daz jemand¹⁶⁸ gepfendet¹⁶⁹ / zü rechte komen solte /
 Harumbe¹⁷⁰ so vorderen / vnd begeren wir / von des vnnsferen
 wegen / daz so Ir Im sin huffrowen / uß gevencknisse vnd
 15 volgen lassen wöllent / Alsdonn sol er über Rechtbott /
 vff vnnsfern gnädigen h[er]rn von Basel vffnemen / vnd
 sich da gegen uch mit rechte entscheiden lassen / vnd
 des über antwort / mit difem botten / Geben vff /
 mitwoch nach martini Anno etc.¹⁷¹ Lxx to 172

20 *Hanns von Berenfels Ritter
Burgermeister vnd der
Rate zü Basel*

*Als über wijheit / mir ein antwort / vff min schriben
 zügefant hat Ist mir vff gester¹⁷³ Worden Dorinn Ir /*

min feyden schimpfflich und unangenehm verfahren
 und das sie / nunmehr und vor Gott geboren gab / und mit
 bestimmter die foren zu genehmigung / wurde den
 übertrag das anbilligliche so do ihre vorheit sich weil
 vor der das der frage uns / die vor im uffgenommen billigen
 ist werden der und es so uffgelassen / wird / auch das es beständig
 das sie nicht die / nicht mehr missfallen in diesen dingen
 mit gut lieb / und weil das ihre vorheit von mir
 mit so beweglich vor / funde ansetzen / das ihre vorheit
 von sich anerkennung mich nicht plus gestafft und
 gegeben zu sein / und das sie konstantlich zu fignung
 von mir / unterworfen blieb / und noch gut bei sich / sein wolt
 das ihre unwill / sich mindere / und mich lassen in gute
 nachlassigkeit / mit nicht bleiben für sie / doch mich anbillig
 von allem angas / daher und niemand billiger dinge daher
 vor zu sein / als sie mich von Gott das stetig mit beständig
 der sie billigen genehm / und von niemand angestrichen ist
 als dann der foren gab / die do ihre vorheit in unvor
 demung ist / so nicht genehmigung / und dem foren / zu wolt
 von zulassen / als dann ist es das vorstet / off / min gut
 dinge / von dem / nehmen / und sich der mit vor
 empfinden lassen / doch sie es sein / weil lassen bleiben / und
 die foren / heraus lassen / so vor / das mich schickere / geben
 wird / das der genant foren / dem vorgang
 und das ed in ein bestimmen zu beständig / und was das mit
 beständig / auch ob die / im / an sich / das so mich dann vor
 der zu hand / als vor / geben / und bereit / wird als sie unvor
 ihre vorheit / sich billigen beduncken ist / mich das / mich
 bestimmter der ihre der foren / nach vorbringung in

min schriben schimpfflich vnd vnnochbûrlich verfochen¹⁷⁴ /
 vnd das Ich / mancherhand¹⁷⁵ rechbott¹⁷⁶ / gebotten hab / vnd nit
 defterminder / die frowen Ir geuengniß halb / wider den
 übertrag das vnbillich klich¹⁷⁷ sij do ûwer wijheit felb wol
 5 verftot¹⁷⁸ daz der Recht eins / vor von Im vffgenommen billichen
 solt werden vor vnd ee¹⁷⁹ so ußgeloffen wurd / ouch daz es beschêch
 daz Ich wijse wie / nun Ist ûwer mißvallen¹⁸⁰ In difen dingen
 mir nit lieb¹⁸¹ / vnd wolt wol / daz ûwer wijheit gen mir
 nit fo beweglich¹⁸² wër / funnder anfechen¹⁸³ / daz ûwer Streng
 10 ernftlich anvorderung mich nôt sölich gefchrifft / vnd
 rechtbott zü tünd / umb daz Ich / vnfrûntlich¹⁸⁴ züfügung¹⁸⁵ /
 gen mir / vnd er wegen blib / ouch noch hût bij tag¹⁸⁶ / gern wolt
 daz ûwer vnwill / fich minderet vnd mich lieffen In güter
 nochburfchafft / mit ûch bliben fitt Ich doch nütz vnbillichs
 15 gen allermenglich begër¹⁸⁷ / vnd niemans billicher ding begër
 vor zü find / als Ich ouch gern hett / daz sölichs mir beschêch¹⁸⁸ /
 des Ich billichen genieffen vnd gen nieman / engelten solt /
 als dann der frowen halp / wie do ûwer wijheit In anvor=
 derung Ist / fo vffer geuengniß vnd dem ûweren / zü vol=
 20 gen zûlaffen / als darin sol er das rechtbott / vff min gnë=
 digen h[er]rn von Bafel vffnêmen / vnd fich / do mit recht
 entscheiden loffen / dobij Ich es gern wil loffen bliben / vnd
 die frowen haruß loffen / fo verr¹⁸⁹ / daz mir ficherheit / geben
 Wërd / daz der genant Clewin rütſchi / dem noch gang /
 25 vnd daz es In ein beftimten zil beschêch vnd wo das / nit
 beschêch / ouch ob Ich Im / an behüß¹⁹⁰ daz sij mir dann wi=
 der zü hand / als ijetz geben / vnd brocht werd / als Ich trûw /
 ûwer wijheit / felb billichen beduncken föll / ouch daz / nütz
 deftermindër der ûwer der tochter noch werbung¹⁹¹ tü¹⁹² /

mit fliß vnd vermugent¹⁹³ / als das / In der übertrag bint¹⁹⁴ /
 vnd daz es / In ein bestimpten zil / beschëch etc. ¹⁹⁵ geben vff
 Samstag noch Sannt Martins Im Lxv Jor

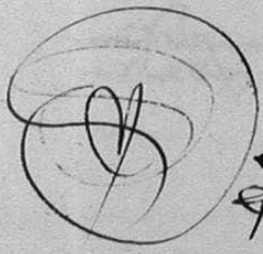
Lieben h[er]rn / noch dem / Ich ûwer wijsheit vff ûwer s[chr]iben /
 5 verschriben hab vnd doruff begert / ûwer antwurt / daz
 noch biß har / sich lang hatt doruff Ich noch hûtbijtag¹⁹⁶ beger
 ûwer antwurt / mich wijsen darnach zû richten / dann mit
 söliche tröw wort fürkomen / dorumb / mir not Ist zûwissen /
 wes Ich mich gen wider Wijsheit ouch gen Clewi Rüt[sch]is
 10 vnd der ûweren / verfehen vnd halten söll / vnd bitt damit
 ûwer wijsheit mit flißigem ernst mir die antwurt lenger
 nit zû verziehen / Geben vff Donstag noch Sannt Mar=
 tins tag Im Lxv

Dem Strengen h[er]rn Bernharten von
 15 Eptingen Ritter etc. ¹⁹⁷

Unns[er]n dienst bevor Lieber her Bernhart / Als Ir vnns
 aber vff vnns[er] letst s[chr]iben geschriben hand / Ir /
 wöllent die frowen / vff das vffnemen des Rechtbots / heruß /
 vnd dem vnns[er]n volgen lassen / doch mit fürworten¹⁹⁸ daz er
 20 das recht verficheren vnd ob er nit vollzûge / das gesprochen
 wurde / die frowen wider / zû ûwern handen zû antwurten¹⁹⁹
 Ouch daz er In einem benanten Zile werben / sol ûch / sin
 tochter so entwichen²⁰⁰ Ist / ze handen ze bringen / mit merer

beghynge inder beghyn mit not ze melden habent
 vore besonden und inuinent daz in schick fueruore /
 off dinge seiden mit ^{not} dem vordem dem uderer
 nach die frouen ons engelichte / bery und dem vordem
 vordem ze lassen se inuinent ze vordem vordem /
 den kaiser buech / des des vordem vordem tag ze setzen
 und die froue ze vordem vordem und dem vordem / mit
 vordem ze vordem vordem se der vordem und
 die vordem vordem vordem vordem vordem da dem vordem
 froue nach dem daz vordem vordem vordem vordem /
 dem vordem vordem vordem vordem vordem vordem
 und die frouen ^{daduff} vordem vordem vordem vordem vordem
 vordem vordem vordem vordem vordem vordem vordem
 dem vordem vordem vordem vordem vordem vordem
 dem vordem vordem vordem vordem vordem vordem

I Jans von Breenfeld Knecht
 vordem vordem vordem vordem vordem
 vordem vordem



in vordem vordem vordem vordem vordem
 vordem vordem vordem vordem vordem

und vordem vordem vordem vordem vordem vordem vordem
 vordem vordem vordem vordem vordem vordem vordem
 vordem vordem vordem vordem vordem vordem vordem
 vordem vordem vordem vordem vordem vordem vordem

101

begriffunge²⁰¹ ûwers briefes / nit not ze melden habent
Wir verstanden vnd meinent daz ûch solicher fürworten /
vff vnnser schriben nit ^not^ tûe²⁰² denn wenn Ir dem übertrag
nach / die frowen one engeltnisse / ledig vnd dem vnnfern
5 volgen²⁰³ ze lassen / so mögent Ir vnnfern gnädigen h[er]rn
von Basel bitten / sich des rechten ze beladen tag²⁰⁴ ze setzen
vnd die sache / zwûschent ûch vnd dem vnnfern / mit
rechte ze entscheiden / Desglichen sol der vnnser / vnd
Wir von sinen wegen ouch tûn vnd da dem rechten
10 frags²⁰⁵ nach gan²⁰⁶ / dazû wir In / ouch halten wöllent / an
dem Ir billich von Im vnd vns / ein benügen habent
vnd die frowen ^daruff^ wie vorstat heruß lassent vnd bege=
bent haruff ûwer entlich antwurt / Geben vff
Samstag Sannt Othmars tag Anno etc.²⁰⁷ Lxv

15 Hanns von Berenfels Ritter /
 Burgermeister / vnd der Rate
 zü Basel

Dem Strengen her Bernharten von
Eptingen Ritter etc. ²⁰⁸ /

20 Vnns[er] willige dienft bevor Lieber herre Bernhart / Als
vnnser Stattfriber ûch / vnnser nachrede²⁰⁹ vff ûwer
widerrede / ûwer lagehalb²¹⁰ ^zu^ uff vnns geton / vff Zinstag²¹¹ /

wechfelingung mit zwey künfftigen in einer
 feindelliden in unvorngefe zu Zuffel zu gefigelt
 und das in ufesnung der monats der erst auff gut
 ufhat unvornget hat da si nun die künfftigen aus
 vndergefont das die andern gefesselt begaltem gund
 die dort billic bi einander liben und ein vnder
 drey nich begaltem oder drey vnder gefesnt vorden
 vorden. Weis aber dem si seigen von uns was in uf-
 gang des monats nach küngele des anlasses comen
 nachrede verfiget. Und das die obgeneldeten kün-
 fte die mit andern gefesselt nich von uns zu
 gefesnt nach küngele des anlasses comen ynd drey
 gen von Zuffel und den zu segen liben übergeben als wir
 ons drey gefesselt begaltem man übersegen seant
 vorden wil zu vorder sind vorden. Weis aber si comen
 künfftige mit gemainen nach übersegen küngele.
 man vordent doanub sel si denoch in vordem mit
 begaltem vorden. Liben auff gut sonst nach
 Jony Jony ad drey voll

Jannus von Bernward Pater /
 Burgermeister und der hies
 Zuffel

nechstvergangen mit zweijen / kuntschafften / In einer
 schindelladen²¹² In ûweren Hof hie zü Basel / zü geschickt /
 vnd doch In ußrechnung²¹³ / des monats der erst uff hüt²¹⁴
 ußgat / mißrechnet²¹⁵ hat / da Ir nu²¹⁶ die kuntschafften / vns
 5 wider gefant / vnd die anndern geschriff / behalten hand
 die doch billich / bij einander blißen vnd / eintweder²¹⁷
 durch ûch behalten / oder vnns / wider gefannt / worden
 werent / Wie aber dem / so schicken wir ûch ijetz / In uß=
 gang / des monets²¹⁸ / nach Innhalt des anlaffes vnnsfer
 10 nachrede verfiglet²¹⁹ / vnd dazû die obgemeldeten Kunt=
 schafft / die mit anndern geschrifften ûch / von vnns zü
 gefant / nach Innhalt / des anlaffes / vnnsferm gnädigen
 h[er]rn von Basel / vnd den zûsatz lüten²²⁰ / ûbergeben / als wir
 ouch / ûwer geschriff / bij legunge Inen ûberschicken söllent
 15 ijeglichen teil zü werde fins rechten / Obe aber Ir / vnnsfer
 kuntschafft / nit ze meinen noch ûberzeschicken meij=
 nen woltent / darumb sol sy dennoch Im rechten / nit
 verhalten²²¹ werden / Geben vff hüt²²² Zinftag nach
 M[ar]t[inus]²²³ / Anno etc.²²⁴ Lxvi / to ll²²⁵

Hanns von Berfels Ritter /
 Burgermeister vnd der Rate
 Zü Basel

史料註

* 手稿史料の活字化ならびに註の作成にあたって、中高ドイツ語についてはおもに、Matthias Lexer, *Mittelhochdeutsches Handwörterbuch*, 3 Bde., Stuttgart 1992; Matthias Lexer, *Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch*, 38.Aufl., Stuttgart 1992; Beate Hennig, *Kleines Mittelhochdeutsches Wörterbuch*, 6.Aufl., Berlin/Boston, 2014. を、略号（縮約表記）については、Paul Arnold Grun, *Schlüssel zu alten und neuen Abkürzungen (Grundriß der Genealogie, Bd.6)*, Limburg an der Lahn 2002. を、暦については、Hermann Grotefend, *Taschenbuch der Zeitrechnung des deutschen Mittelalters und der Neuzeit*, 11.Aufl., hg. v. Ulrich, Th., Hannover 1971. をそれぞれ参照した。

なお、今回取り上げた手稿史料のうち第 1 ページにあたる 90 ページのみすでに活字化されて、*Urkundenbuch der Stadt Basel*, hg. v. d. Historischen und Antiquarischen Gesellschaft zu Basel, Bd.8 (bearb. d. Rudolf Thommen), Basel 1901, Nr.257 (S.202-203) に収録されている（以下、*Urkundenbuch*, Nr.257 と略記）。本稿では、手稿史料に基づいて活字化を試みたが、不明の点については *Urkundenbuch*, Nr.257 を参照した。ただしすべてこれに倣ったわけではなく、両者に異同も多い。

また全体を通して、同じ内容の註の繰り返しは基本的には避けたが、場所によっては必要に応じて敢えて繰り返している箇所もある。

- 1 *tund kunt* < *kunt tuon* = *bekant machen* 「知らせる」、*sagen* 「言い渡す」
- 2 *menglichem* < *menglich* = *manneglich* = *jeder, jedermann* 「皆の者」
- 3 *nu* = *nun* 「今は」
- 4 手稿史料では明らかに *her in* の 2 語に分かれているが、*Urkundenbuch*, Nr.257 では *herin* となっている。現代ドイツ語としては *herin* が正しい。また *her in* の次の語を筆者は *gen* としたが、*Urkundenbuch*, Nr.257 では *gon* となっている。
- 5 *ettlicher* < *etlich* 「いくつかの」
- 6 *Ratffrunde* < *Ratsfreund* 「市参事会仲間」
- 7 *Spenne* = *Span*, *Spannung* 「対立関係、確執、軋轢」
- 8 *ubertragen* = *schlichten* 「解決する」
- 9 手稿史料では明らかに *her nach* の 2 語に分かれているが、*Urkundenbuch*, Nr.257 では *hernach* となっている。現代ドイツ語としては *hernach* が正しい。また *her nach* の前の *in maffen* = *entsprechend* で「それに応じて」の意か。そのあとの *geschriben ftat* に続く *dem ift alfo* の意味が判然としない。
- 10 *die wile* = *während, solange, inzwischen, als, weil* 「～の期間は」、「～なので」あるいは「～ならば」ぐらいが妥当か。その前の *das alle* との関係が判然としない。
- 11 *huffrowen* = *hûsvrouwe* = *Ehefrau, Gattin* 「妻」
- 12 *als* 「～と同様に」。その前の 3 語 *doch das die* との関係が判然としない。
- 13 *sturen* = *steuern* 「担税義務がある」
- 14 *keyneft* = *jemals* 「いつか」。通常、*niemals* 「一度も～ない」や *kein* 「決して～ない」のように否定の意味になることが多いが、ここではそれでは文意が通じない。
- 15 *wider* = *wieder*
- 16 *alfdenn* = *alsdann* 「そののち」
- 17 *ubertrages* < *ubertrag* = *Vertrag* 「協定、協約」
- 18 *Empteren* < *Empter* = *Ämter* < *Amtsbezirk* 「管轄区」

19 *wunne* = Wiesenland 「草地」。*wunne und weide* のように対で用いる場合が多い。ここでもそのようになっている。

20 *nyeffen* = nießen 「用益権を所有する」

21 *bruchet* < *brauchen* 「必要とする、使用する」

22 *weyden* < *Weide* 「牧草地」

23 *roube* = *roup* = *ernte eines feldes* 「収穫」

24 *wa* = *wo*

25 *halb* = halber 「～のせいで」。*Her Bernharts halb* 「ベルンハルト殿のせいで」

26 *fliße* < *vliz* = *Streben* 「努力」

27 *obe* = *ob* = *wenn, falls* 「～の場合には」。手稿史料では明らかに *obe* だが、*Urkundenbuch*, Nr.257 では *ob* となっている。

28 *empfremdet* < *entfremden* 「疎遠にする」。ここでは *sich* をともなって「疎遠になる」

29 *furgenomên* < *vornehmen* 「企てる」

30 *volfuieren* = *vollführen* 「実行する」

31 *vtzit* = *utzet* = *irgendein* 「何か、誰か」

32 手稿史料では *hinstan* と 1 語に見えるが、*Urkundenbuch*, Nr.257 では *hin stan* と 2 語に分けている。
stan < *stehen*

33 *nutzit* = *niht* = *nichts*

34 *ee* = *Ehe* 「結婚」

35 *beden* = *beiden*

36 *truwen* < *triuwe* = *Vertrauen* 「信頼、信任」

37 手稿史料では *zehaltende* と 1 語に見えるが、*Urkundenbuch*, Nr.257 では *ze haltende* と 2 語に分けている。

38 同じく、手稿史料では *zetünde* と 1 語に見えるが、*Urkundenbuch*, Nr.257 では *ze tünde* と 2 語に分けている。

39 *furbracht* < *vorbringen* 「申し立てる、述べる」

40 *one* = *ohne*

41 この略号に関しては *Urkundenbuch*, Nr.257 に倣って *Christi* とした。Grun, *Schlüssel*, S.183 も参照。

42 この略号に関しては同じく *Urkundenbuch*, Nr.257 に倣って *etc.* とした。Grun, *Schlüssel*, S.196, 298 を参照。

43 *bevor* 「～を前に」。ここは「親愛なるベルンハルト殿を前に、われわれは喜んで奉仕つかまつり候ところ、…」ぐらいの前口上の意。

44 *fovil* = *so vil* 「とても多くのことを」

45 *verschafft* < *bestimmen* 「取り決める」

46 *ûwern* = *iuwer* = *euer* = *ihr* 「あなた（がた）の」

47 *glöuplich* = *glaubwürdig* 「信用に足る」

48 *gan* < *gehen*

49 *begeren* = *begehren* 「要求する」

50 *ûch* = *euch* 「あなたに」。*ûch* = *ach*, *och* = *auch* では意味が通じない。

51 *ledig* 「拘束されない、免れている」

52 *dennoch* = *doch* 強調の意と捉えた。そのあとに続く *ûch* も史料註 50 に同じ。

53 *botten* = *Gebot* 「要請」

54 さしあたり *etc.* とした。1465 年の「1400」を示す略号と見える。しかし形状からすると、Grun, *Schlüssel*, S.196, 298 の例にある *et cetera*、すなわち *etc.* が該当する。

55 「65」すなわち 1465 年を示す。

- 56 *wifheit* = Weisheit 「分別、思慮」。 *ûwer wifheit* で「貴殿ら分別ある方々」の意か。
- 57 *Rütfchi* という苗字からすると、 *Rütfchlis* の *l* が余分に思える。*l* ではないのかもしれない。
- 58 *fig* = sei オトナン＝ジラル女史のご教示による。
- 59 *femlichen* < *samelich* = *gleich*, *ähnlich*, *solch* 「そうしたこと」
- 60 *fig* = sei 史料註 58 に同じ。
- 61 さしあたり *etc.* とした。Grun, *Schlüssel*, S.196, 298 を参照。
- 62 *fürfichtigen* < *vürsihtic* = *verständlich*, *umsichtig*, *fürsorglich* 「思慮ある」、「思慮深い」、「配慮のある」
- 63 *fton* < *stehen*
- 64 *könd* < *können*
- 65 *müter* = *muoter* = *Mutter* 「母」
- 66 *uffließ* < *auslassen* 「放す」
- 67 *gütwillig* = *guotwillic* = *bereitwillig* 「喜んで～する」
- 68 *befchicht* < *beschehen* = *geschehen* 「身に振りかかる」
- 69 *benügsam* < *benüegen* 「十分である」
- 70 *befechen* < *beschechen* = *geschehen* 「起こる」
- 71 *lib eygen* = *Leibeigen* 「体僕」
- 72 *fünshalp* = *sun* + *halb* 「息子の件」
- 73 *bëduren* ? *bëduten* ? どう見ても最後から 3 つ目の文字は *r* に見えるが、*t* に見えなくもない。前者であればどの辞書にも類する単語はなく、後者であれば、*bediuten*, *bedüten* = *zu verstehen sein*, *bedeuten*, *bezeichnen*, *meinen*, *sagen* などが匹敵する。
- 74 *vnbenüigen* = *ungenügen* 「不十分な」。*vnbenüigen lüten* は「不十分な人々」つまり「体僕」のことか。
- 75 *geschuldiget* < *schuldigen* = *beschuldigen* 「咎める、罪を帰する」
- 76 *betedinget* < *beteidigen* = *anklagen* 「告訴する」。過去分詞 *betedinget* で「告訴された者」の意か。
- 77 *angemütet* < *anmuten* 「要求する」
- 78 *befand* < *besenden* = *zusammenrufen* 「召集する」
- 79 *verlagt* < *verlegen* 「居を移す」
- 80 *vnworheit* = *Lüge* 「偽り」
- 81 *loff* = *lôz*, *lôs* = *Willkür* 「布告」、*Recht* 「法」
- 82 *engelten* = *büßen* = *Buße* 「償い、賠償金、代償」
- 83 *hinderfeß* = *Hintersaß* 「庇護民、隸農」
- 84 *hiechen* < *hîwe* = *Hausgenosse* 「家内労働者」、*Dienstbote* 「使用人、奉公人」
- 85 *sunnder* = *vielmehr*
- 86 *bachen* = *verbacken zu* 「パンを焼く」
- 87 *malen* 「塗装する」
- 88 *wirt* 「宿屋の亭主、夫」
- 89 *toft* < *toesen* = *dôsen* = *zerstören* 「台なしにする、壊してしまう」
- 90 *Buw* < *bûwen* = *bauen* 「耕作する」
- 91 *bruch* = *Brauch* 「使用」
- 92 *ftatt* = *statt* 「～の代わりに」
- 93 *wart* < *warten* 「待望する」
- 94 *entfrömdung* < *entfremden* 「転用する、疎遠にする」
- 95 *geftatt* < *gestatten* 「許す」
- 96 *argem* < *arg* 「邪悪な」
- 97 *vermercken* = *bemerken* 「認める」
- 98 さしあたり *etc.* とした。Grun, *Schlüssel*, S.196, 298 を参照。

99 称号を示すと考えれば *Ritter* が該当するだろうが、さしあたり *etc.*とした。略号の形状は *etc.*に見える。Grun, *Schlüssel*, S.196, 298 を参照。

100 *zügefant* < *schicken* 「送る」

101 *eben* 「まさしく」

102 *schimpfflich* = *schimpflich* 「不名誉な、屈辱的な」

103 *frömde* = *vremde* = *fremd* 「なじみのない、隔たりを感じる、奇妙な」

104 *nieman* = *niemand*

105 *stat* < *stehen* ?

106 *ûch* = *euch*

107 *hafft* = *gefangen* 「捕らえられた」

108 *zuge* < *Zug* 「願望」

109 *roube* = *roup* = *ernte eines feldes* 「収穫」。史料註 23 に同じ。この単語は何度見ても *wube* にしか見えなかった。しかし *wube* という単語は辞書では見つからない。そこでこの部分の文脈を推測するなら、*er mit finem zuge fine gütere buwen vnd den [wube] davon nēmen moge* 「彼は望みのままに自身の土地を耕し、そこから [収穫] を得たいと思う (得てもよい)」となろう。*wube* が「収穫」に類する意味の定冠詞 *den* をともなう男性名詞であれば文意は通じるし、文法的にも説明がつく。その一方で、*wube* = *Weib* 「妻」の可能性も考えたが、文意に違和感があったし、女性名詞の定冠詞 *den* が文法的に説明できない。最終的には、史料註の見直しの途中で史料註 23 で *roube* 「収穫」を発見した。ちなみに史料註 23 の単語は大文字で始まっている。

110 *erloubet* < *erlauben* 「許す」

111 *libfnarunge* = *Leibsnahrung* 「体僕の扶養」

112 *geschriffte* = *Schreiben* 「書状」

113 *nūwerunge* = *niuwerunge* = *Neuerung* 「改良」

114 *fûrnēmen* = *vornehmen* 「前へ進める、決心する」

115 *gedencken* 「思い出す、言及する」

116 さしあたり *etc.*とした。Grun, *Schlüssel*, S.196, 298 を参照。史料註 54 に同じ。

117 2013 年に別の手稿史料に関してオトナン＝ジラル女史に教わったところによると、*xv^{to}* の右肩の *to* は *um* を示す。

118 *zwaren* = *zweimal*

119 *truwen* = *hoffen* 「願う」、*erwarten* 「期待する」、*glauben* 「信じる」

120 *farnd* < *fahren*, *gehen*

121 *vrbüttig* < *bütic* = *erbötig* 「用意がある」

122 *vermeinen* = *hoffen*, *denken*

123 *befechen* < *besehen* 「見なす、評価する、考えに入れる」

124 *defglic* = *desgelichen* = *gleichfalls* 「同様に」

125 *gitt* < *geben*

126 *nach ordnung keyferlichs rechten* 「皇帝の法の規定に基づいて」

127 *verwûrckung* < *verwürken* = *verwirken* 「(権利を) 喪失する」

128 *wirt* = *Ehemann* 「夫」

129 *getruw* < *getriuwen* = *vertrauen* 「信頼を置く」

130 *vntûr* = *untiuere* = *nicht selten*

131 *enthaltniffe* = *Zurückhaltung* 「慎重さ、自制」

132 *bijftand* = *bîstant* = *Hilfe*, *Beistand* 「援助」

133 *brüch* = *Bruch* 「破棄」

134 *Irrung* = *Irrtum* 「誤り、間違い」

- 135 *befchöch* < *begegnen* 「遭遇する」
- 136 *ftiffigem* < *fleißig* 「熱心な」
- 137 *herbietten* = *herbitten* 「呼び寄せる」
- 138 *zedels* < *Zettel* 「紙片」
- 139 *mißfiven* = *missive* = *sendbrief* 「書状」
- 140 *beflossen* < *beschließen* 「包み込む」
- 141 *vnzimlich* = *ungehörig*, *unangemessen* 「不適切な」
- 142 *verftatt* < *verstehen* 「理解する、解釈する」
- 143 *fûrnêmen* = *auftragen* < *Auftrag* 「依頼」
- 144 *verfagt* = *versagen* 「拒む」
- 145 *die minen* 「わが領民」
- 146 *fowitt* = *soweit* 「その限りでは」
- 147 *urbüttig* < *bütic* = *erbötig* 「用意がある」
- 148 *vermercken* = *bemerken* 「認める、感じ取る」
- 149 *trûw* < *bitten*
- 150 *dheinerlëy* < *dehein* = *irgendeine*, *irgendetwas*, *irgendwelche* 「何か、どこか」。これに続く *Irren* は「間違い」の意であろう。
- 151 *bût* < *bûten* = *bieten* 「申し出る」。一見 *bitt* と迷うが、語末の *t* の横線がどう見ても最後から 2 番目の文字につながっておらず、*tt* とは見えないため、*bitt* ではなく *bût* だと判断せざるを得ない。
- 152 *annemen* = *sich vornehmen* 「取り組む」
- 153 *official* 「司教区裁判所の首席判事」
- 154 *bût* < *bûten* = *bieten* 「申し出る」。史料註 151 に同じ。
- 155 さしあたり *etc.* とした。Grun, *Schlüssel*, S.196, 298 を参照。
- 156 *fûrtgevordert* のように見えるが、*t* があるのか、*fûr gevordert* をつなぐ線を書き足しているのかが不明。後者であれば、*fûr gevordert* = *fûrgevordert* 「召喚された」の意か。
- 157 さしあたり *etc.* とした。Grun, *Schlüssel*, S.196, 298 を参照。
- 158 *fitz* < *setzen* ここでは「裁判権を有す」の意か。
- 159 さしあたり *etc.* とした。Grun, *Schlüssel*, S.196, 298 を参照。
- 160 *Somsetag* = *Samstag*
- 161 *gnüg/botten* *gnüg* と *botten* の間に区切り線が入っているのがかろうじてわかる。
- 162 *Inzûgen* < *înzuc* = *Entrückung* 「引き離し」
- 163 *fûr ware* = *wahrhaftig* 「まことに」
- 164 *nachburschafft* = *Nachbarschaft* 「隣人関係」
- 165 *beduncken* = *Meinung*
- 166 *mengerhand* = *viele*
- 167 *deftminder* < *desto* + *minder* 「少なければ少ないほど」?
- 168 *ijemand* = *jemand* = *irgendein* 「誰かが」
- 169 *gepfendet* < *pfinden* 「差し押さえる」。ここでは「拘束する」の意か。
- 170 *harumbe* = *herumbe* = *herum*
- 171 さしあたり *etc.* とした。Grun, *Schlüssel*, S.196, 298 を参照。史料註 54 に同じ。
- 172 史料註 117 を参照。
- 173 *gfter* = *gestern* 「過去」
- 174 *verfochen* < *versuochen* = *erproben*, *nachsehen* 「確かめる」、*auskundschaften* 「突きとめる」、*erleben* 「身をもって知る」
- 175 *mancherhand* < *mancherlei* 「さまざまの」

- 176 *rechbott* = Rechtgebot 「法」
- 177 *klich* = gelich = gleich, ähnlich
- 178 *verftot* < versteht < verstehen
- 179 *ee* = ehe 「～以前」
- 180 *mißvallen* = Mißfallen 「不快、不機嫌」
- 181 *lieb* < lieben 「好む」
- 182 *bewöglich* = heftig 「激しい」
- 183 *anfechen* = ansehen = betrachten 「見なす」
- 184 *vnfrúntlich* = unfreundlich 「友好的でない」
- 185 *züfügung* = zuovûgunge = Verbindung 「結びつき」
- 186 *hút bij tag* = heute 「今日」
- 187 *begër* < begehren 「要求する」
- 188 *befchëch* < geschehen 「身に振りかかる」
- 189 *verr* = verre = entfernt, fern
- 190 *behüß* < behüsen = mit einem hause versehen 「家をあてがう」、*ins haus aufnehmen* 「家に迎え入れる」
- 191 *werbung* < erlangen
- 192 *tü* < tun
- 193 *vermugent* = vermügen = Kraft, Macht 「権力、力」
- 194 *bint* < binden 「結びつける、義務づける」
- 195 さしあたり *etc.*とした。Grun, *Schlüssel*, S.196, 298 を参照。
- 196 *hútbjtag* = heute 「今日」。史料註 186 に同じだが、3 語に分かれているか一連かの違いがあるのみ。
- 197 さしあたり *etc.*とした。Grun, *Schlüssel*, S.196, 298 を参照。
- 198 *fûrworten* = Ausflucht 「口実、言い逃れ」
- 199 *antworten* = übergeben 「委ねる」
- 200 *entwichen* = entweichen 「逃れ去る」
- 201 *begriffunge* = Verständnis
- 202 *tüe* < tun
- 203 *volgen* = folgen 「従う」。ここでは 3 格代名詞をともなって、*dem unnfern volgen ze laffen* 「わが領民に従わせる」。
- 204 *tag* 「裁判」
- 205 *frags* < vrâge = Frage, Bitte, Forderung
- 206 *nach gan* < nachgehen 「追い求める、問題を究明する」
- 207 さしあたり *etc.*とした。Grun, *Schlüssel*, S.196, 298 を参照。史料註 54 に同じ。
- 208 さしあたり *etc.*とした。Grun, *Schlüssel*, S.196, 298 を参照。
- 209 *nachrede* = Wiederholung 「反復」
- 210 *lagehalb* < lage = Zustand 「状態」
- 211 *Zinftag* = zinsttac, zîstac = Dienstag 「火曜」
- 212 *schindelladen* < Schindel + Laden Schindel 「へぎ板」?、Laden = kleiner Kasten 「小さく粗末な建物」?
- 213 *ußrechnung* < Ausrechnung 「推定」?
- 214 *hútt* = heute 「今日」
- 215 *mißrechnet* *miß* は「失敗に終わる」、*rechnet* < rechnen 「当てにする」
- 216 *nu* = nun
- 217 *eintweder* = entweder = eine(r/s) von beiden 「2 つのうち的一方」
- 218 *monets* = Monat
- 219 *verfiglet* < versiegeln 「封印する」

- 220 *zůfatz lůten* = *zuosaz-liute* = *Beigeordnete* 「(現代に置き換えれば) 副市長、助役」
- 221 *verhalten* 「顧みられぬまま放置される」
- 222 *hůt* = *heute* 「今日」
- 223 この略号については不明だが、経験則から *Martinus* と解釈した。
- 224 さしあたり *etc.* とした。Grun, *Schlůssel*, S.196, 298 を参照。史料註 54 に同じ。
- 225 史料註 117 を参照。to の右横に付く *ll* については不明。

【謝辞】

史料のデジタル写真の入手にあたっては、当公文書館のミレイユ・オトナン＝ジラル女史ならびにスタッフの方々のご厚意に心より感謝したい。2003年8月に初めて当公文書館(リニューアル前)を訪れて以来、中世古文書解読に長けたオトナン＝ジラル女史にはお世話になり続けた。2回目の訪問は翌2004年で、その後しばらく訪問は途絶えたが、当公文書館のリニューアル後は、2011年から2019年まで毎年訪れては、ほんの1日程度ではあったが、15世紀後半のパーゼル農村邦に関するさまざまな手稿文書史料にチャレンジする機会を得た。オトナン＝ジラル女史は筆者の訪問日程に合わせて貴重な時間を割いてくださり、いくつもの不明な箇所に関して口頭ならびに筆談で根気よく答えてくださった。2003年に偶然の出会いがなかったら、そして2011年に当公文書館に久方ぶりに訪問しようという気にならなかったら、筆者はこままでスイスの古文書にのめりこむことはなかっただろう。女史は筆者にとって古文書解読の得難い師匠である。

ところで、本稿で扱った史料にかつて取り組み、活字化を試みたことがあったとは筆者自身まったく覚えていなかった。本手稿史料の文字の判読ならびに文意の読解はあまりにも難解で、取り組んではみたものの途中で放棄したままだと思い込んでいたのである。しかし今回、史料註に取りかかった直後に、本手稿史料に関してかつて不本意な出来のまま公刊したことがあったのをたまたま「発見」してしまった。あわてて記憶をたどった限りでは、おそらく2004年の訪問時にオトナン＝ジラル女史にいくつか質問をぶつけたものと思われる。ただその時はわからないことがまだまだ多すぎて、また遠慮もあって、限られた時間内にすべてを解消することは断念し、そのうちのごく一部のみの質問にとどめた気がする。多くの疑問点を抱えたまま数年後に活字化して公刊したのは、今考えれば早計だったかもしれない。そしてその後すぐに別の長大な手稿史料に深入りしたため、本手稿史料への取り組みの経験じたいが忘れ去られた。したがって今回の判読作業は、かつて取り組んだ記憶を呼び起こすこともないままに当時と同じ作業をしたことになるが、逆に新鮮な気持ちでゼロからスタートさせることになった。昨年、一昨年と海外渡航もかなわず、女史から新たにご教示いただく機会はなかったため、本手稿史料への取り組みは自身で努力するしかなかったが、ドイツ語の手書き文字の判読に関して旧稿から多少の進歩が見られたとすれば、10年近くに及ぶ当公文書館でのチャレンジの賜物だと思いたい。本手稿史料に関しては、いまだ文意が取れない箇所はかなりの数に上るし、判読のミスも少なからず残っているであろうが、今後も機会を見つけて少しずつ修正を加えていきたい。デジタル写真の掲載に関してはオトナン＝ジラル女史ならびに当公文書館より許諾を得た。心から御礼申し上げます。

[本稿は JSPS 科研費 (JP19K01075) の助成による研究成果の一部である。]